

323
438



始



最新
應 用 速 記 術

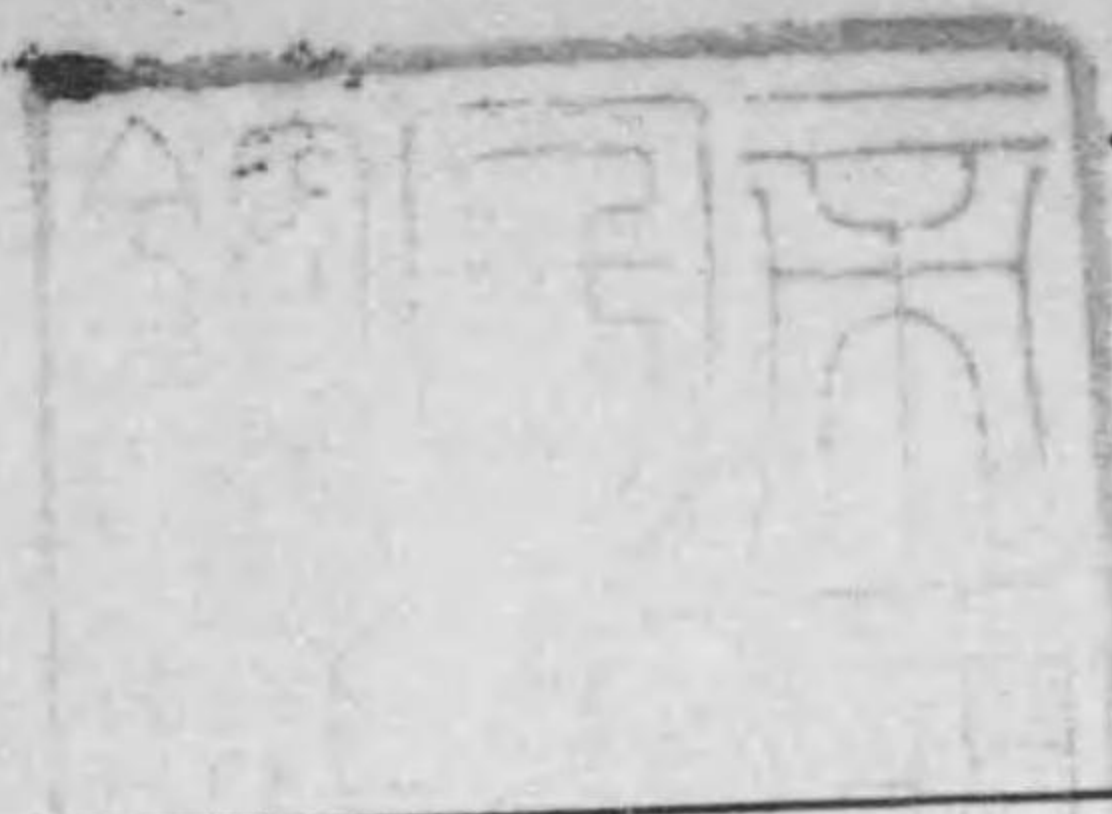
序

赤 司 應 一 郎 閣 下
熊 崎 健 一 郎 先 生

著 者

櫻 井 郷 三

323-438



最新
 應 用 速 記 術
 序
 赤 司 鷹 一 郎 閣 下
 熊 崎 健 一 郎 先 生
 著 者
 櫻 井 鄉 三

大正
 11. 9. 6
 内交

正 誤

- 十六頁 變則縮字應用例中「屋敷」より「傳はるこ」まで速記文字轉倒せり
- 四十三頁 ナ行縮字中「ニノ」の速記符號脱落せるものあり
- 五十九頁 複語疊字符合應用例中「歴々」の速記符號脱落せるものあり
- 六十三頁 肯定線の應用例中「大詔煥發せられん」「行幸あらせらるれば」の速記符號脱落せるものあり
- 七十頁 語尾接續詞略符(二)中「ナラン」より「タラン」までの速記符號は轉倒せり
- 百十四頁 速記文字連續の實例(其二)中「心を生かして呉れる」の一行速記符號轉倒せり
- 百二十五頁 格言中「瓦石」^{とび}あるは「飛石」の誤
- 百三十頁 相場略符應用例中「二錢方」^{とび}あるは五錢方の誤



熊崎式速記術發明者
熊崎健一郎先生



著者 櫻井郷三氏

序

速記術が文明の社會に缺く可からざる一大利器たることは今更申す迄もないと共に斯術の發達如何は直に其國文化の程度を卜知するに足るといふも決して過言ではない。而して我國に於ては明治十五年田鎖綱紀氏によりて始めて斯術が世に發表され明治二十三年の初期帝國議會の議事速記に應用されてよりは年と共に發達して府縣會の議事其他演説、講話、電話等各方面に用ひらるゝに至つたのであるが、初期議會より完全なる速記録を有するものは世界文明國中獨り日本のみなりとのことは我速記界の大なる誇りとなつて居る所である、其後明治四十年前後

熊崎健一郎氏によりて熊崎式速記術なるものが發表され
たが其方法極めて簡單明瞭で之を實地に應用して頗る便
利であるとの好評は忽ち事實の上に現はれて僅か十數年
の間に急速なる普及を遂げて今や全國各新聞通信社諸會
社等の方面に於て盛に利用せられつゝあるといふこと
である。

我國に於て古來用ひ來つた文字は甚だ複雑晦澁で少くも
も發音の數倍乃至十數倍の時間を費さねば之を書寫する
ことが出來ぬ、即ち人の意思表示の二大機關で恰も車の
兩輪の如き關係にある言語と文字とが斯の如き縁遠い狀
態をなして居つたことは我國文化の發達に大なる障害を

及ぼして居つたのである、併し一たび此の速記術が發明
さるゝや叙上の障害は忽ち除去せられて文化の促進に如
何に多大の貢獻を爲すに至つたかは想像するに餘りある
次第である。

世間往々にして、羅馬字國字論を高唱する者がある、成
程羅馬字は多畫難解なる漢字に比すれば甚だ平易簡便で
あるけれども人の發音を其儘移寫する即ち言葉の寫眞た
る速記術に比べれば到底同日の論ではない、然るに斯く
迄至便なる速記術に對して未だ速記國字論を提唱するも
のゝないのは如何にも不思議である。

自分は斯術に就て深い研究を重ねないから國字としての

理論上の價值を云々する譯には行かぬが若し此の至便なる速記文字を國字として一般に應用することが出来たならば其利便たるや計り知る可からざるものがあらうと思ふ。此點に就て自分は常に考慮を拂つて居る。即ち今日の速記術は多く専門家のみの用に供されて居るが若し之を國民全般に普及せしめたならば如何であらうかと。所が幸にも目下我國速記界に重きをなして居る櫻井郷三君が斯術を一般に普及せしめんと目的を以て現時最も優秀なりとの定評ある熊崎式速記術を敷衍詳説して『最新應用速記術』なる一書を公刊せらるゝことゝなつた。本書の内容の整頓充實せることは櫻井君の人格と手腕とを

知るものゝ等しく認識せる所であるから、此書が我速記界の發達に貢獻することは頗る大なるものがあらうと思ふ、自分は本書の刊行が速記術の普及に非常なる効果あることを信じ斯界の爲め將又我國文化發達の爲め深く之を喜ぶのである。是れ茲に一言を寄せて序文に代へた次第である。

大正十一年七月 日

文部次官 赤司鷹一郎

序

速記術が現代の文化生活に絶大の一要素を爲して居ることとは、嗚々する迄もない、之を廣く活用して文運の發達に資し之を深く應用して人智の啓發を促す、固より當然のこととて、斯術の普及と否とは其國の文明を尺度するハロメーターである。

我國に於ける速記術の歴史的沿革は相當に久しいものだが今は之を叙述するの煩を避くるとしても其間に生れた多くの法式と、之に依つて輩出した多くの人材が國家社會の文化史上に如何に大なる貢獻を齎らして居るかは敢

て喋々を要せぬ顯現の事實であらう。今日斯術が社會の有ゆる方面に應用され活用さるゝ所以のものも寔に偶然ではないのである。

翻つて現代の世相を観るに社會百般の事、年と共に愈繁を加へ月と共に益煩を致すの狀勢である、此秋に當つては到底舊套に甘んずる譯には行かない。茲に於てか勞を省き冗を節し以て諸多事務の簡捷を圖り能率の増進を期するは實に現時代に對應すべき最良の策でなければならぬ况や速記術の如き文化的性質のものに於ては切實に其必要を痛感するのである。

予不敏なりと雖も熟ら時勢を通觀し此駸々乎たる現代に

適應せしめんとするには諸事簡にして便、捷にして利なる經濟的純理に立脚しなければならぬ所以を知つて居る即ち今より十餘年前苦心研鑽の結果熊崎式速記術なる一法式を編纂して之を廣く社會に公表したのである。所が幸にも予の努力は酬ゐられた、貧しき予の理想は達成せられた、發表後僅か十數年にして予の法式の優秀は一般に承認され翕然として斯界を風靡する狀勢に立至つた、而して其構成の簡にして易、條理の井にして然、苟も一絲を紊さざる三段活用の便法に於ては恐らく何物の比儔をも許さずと迄激賞したものとさへあつた、其評の適否は識者の明斷に委すより外はないが、同式に關する書冊の

序

數に於て其賣行の盛なる點に於て斯界に類例がないのを見ても一弧は以て全周を推するに足ると云ひ得るのである、敢て自ら誇る譯ではないが、熊崎式發表後の業績は實際天下公知の事實である、見よ今や幾百の同式應用者は新聞雜誌界に或は會社銀行に或は議會府縣會其他に於て親しく速記事務に鞅掌し如實に文化の向上促進の爲め萬丈の氣を吐いて居るではないか。斯くの如き多士儕々たるが中にも特に東北の都、仙臺市に於て恰も北斗の如く燦然たる光輝を放つものに櫻井郷三君なるものがある君は前河北新報社の速記部長より轉じて帝國通信社仙臺支局長となり次で新東北社に入り同社速記部長として俊

敏練達の妙技を揮ひ目下速記術普及のため努力しつゝあり、最も將來ある天才的技術者の一人として重きをなして居る、君は實に熊崎式の生める貴重なる寶玉で同式の眞價を現實に物語る明星である、君の過去及び現在の努力は實に東北文化の一半を擔當する貴き使命の行使者として大に推奨するの値あると同時に未來も亦然りであると斷じて差支はないと思ふ。

同君此度多年の蘊蓄を傾け『最新應用速記術』なる一書を公にし益斯術の普及を圖り同時に一般民衆をして新時代の欲求に順應せしめやうと企てられた其抱負の大にして徹底的なる誠に君ならずんば能はざる所である。

予曾て私かに思ふ、近來社會の一部に羅馬字國字論を提唱するものあるに拘はらず未だ速記國字論の現はれぬのは甚だ遺憾であると、予は近き將來に於て我速記國字論の具體化するを豫斷するに憚らないと共に社會民衆が必ず速記の喫緊缺くべからざるものたることを感ずる時期の到來することを信ずるものである。

予は現在各地に於て地方有志者又は教育家若くは青年團其他に對し各種の講演を試むる場合多く大正十年中に於ても一時間乃至三時間に亘る講演回数實に百三十七回に達して居るが其演壇上に立つ毎に痛切に速記の必要と効果の偉大なるを思ひ同時に速記者の巧拙と法式の良否を

考ふる例であるが偶々速記者不在の講演會に臨む場合には甚しく現代の文化に遠ざかつて居る様な感じがするのである。

云ふまでもなく現代は空に飛行機あり陸に自動車ある時代である、駕籠や飛脚に類する晦澁不便なる舊文字にのみ親んで居る時ではない、願くは大方の諸君、我櫻井君の新著が如何に時勢に適合せるものなるかを知ると共に眞に人文發達の先驅者であることを領得され以て君の人格的發露と輕妙至便なる斯術の閃きに浴せられんことを翹望に堪へないのである。

大正十一年七月

熊崎健一郎

要言

著者 櫻井郷三識

速記術が社會文化の發達に貢献しつゝある事は實に偉大なものであつて其需用は日と共に増大されつゝあり速記術は最早今日に於ては一部職業者の手に委すべきものでなく各人自らこれを修得し有ゆる方面に有ゆる機會に實用に供し分秒を争ふ活社會に立つて時間の經濟を計り能率を増進し以て各人の福祉と國家の隆昌に資せねばならぬのであつて速記術は文化生活上各人必修の技術である然るに我國速記界の現状を見るに其普及の程度に於て將た又利用の範圍に於て未だ吾人の期待に副はないのは泰西先進

國のそれに比し誠に遺憾に堪へない次第である、然らば其原因何れにありやといふに我國速記術發明以來日なほ淺き事が第一の原因であるが簡單にして而も完全なる速記術の發明されなかつた事が又其最大原因を爲して居ると思ふ、從來速記術は六ヶ敷いものである、成功し難いものであると云はれて居るが決してそんなに六ヶ敷いものでもなければ又成功し難いものでもない、否寧ろ凡そ學術と名の附くもの技術と稱されて居るものゝ中でこれ位ひ簡單なそして成功し易いものはないのである、然し一口に速記術と云つてもいろいろ種類があつて中には難解不成の嘆聲を發せしむる様なものもある事は事實であるが然し時代の進歩と共に其種のもの自然に淘汰さるべく運命づけられて居るのであつて現今に於ては彼等一部の舊式者流が如何に手前味噌の牽強附會の論説を逞しふしても時代に目醒めた新人の心を魅惑する事は到底不可能事であつて速記者は如何にも非凡な頭腦の

言 要

所有者たる天才でもあるかの如くに思はれた時代は哀れ槿花一朝の夢と過ぎ去つて仕舞つたのである、然るに今なほ速記術が難解不成のものであつて一部職業者の獨占的技術であるかの如くに誤解されて居るのは其普及宣傳が足らないのと又一つには速記者なる一部階級者中にこれを汎く普及する事によつて自己の勢力範圍を冒され延て其生活を脅かされはしないかとの杞憂を懐く偏見者のあつた事にも因りはしないかと思はれる、然るに一度我恩師熊崎健一郎先生によつて最新熊崎式速記術の發明せらるゝや其方式の簡にして明、其應用の縦横自在なる點に於て忽ち我國速記界に一大勢力を爲し現に最も速記者の活動を要する新聞通信社等に就て見るも熊崎式速記者が其過半数を占めて居り然も青年有爲の速記者は斯式によつてのみ多く輩出されつゝある現状であつて速記者で熊崎式でないものは肩身が狭いといふ様な有様になつて來たのであるがこれに依つて見ても熊崎式が

如何に簡便でも成功し易い速記術であるかといふ事を證明し得るのである、而して所謂舊式速記術によつて今尚ほ速記者としての位置を保つて居る人達は實際天才的非凡な人士のみであつて此意味に於て吾人は常に敬服に堪へぬのであるが、天才は何時の世にも多く出るものではなく而も熊崎式凡才速記者が天才的舊式速記者と伍して大に斯界に氣焔を擧げつゝあるのは誠に不可思議なる奇現象といはなければならぬ、現に自分も最初は所謂舊式術の門に入り研鑽大に努めたのであるが不幸にして天才のテの字も持合せなかつた悲しさは中途にして筆を擲ち難解不成の長大息を漏さざるを得なかつたのである、然るに偶然熊崎先生の著書最新速記術を見て其輕妙なるに感じこれによつて再び研究を續けた所僅々六箇月にして立派に所謂天才兒となり終せたのである、其時から自分の速記者生活は始つたのであるが而もこれを以て未だ満足せずより以上簡便なる速記術を案出せんも

のと種々苦心研究に没頭したのであるがこれ等の努力は悉く失敗に終りいよ／＼熊崎式の神妙簡便なるに敬服したのであつた、斯して自分は又々もとの凡才兒に立歸つたのであるが凡才に歸つて見ると熊崎式でもなほ且つ難澁を感じる點があつたり不可抗力ではあるが時々間違をしでかしたりするので大に悲觀せざるを得なかつたのである而して自分はこれ等の點につき過去十餘年間の苦しき實地の經驗より案出したる各種の方則を以て熊崎式に些か改修を加へ茲に漸く本應用速記術なるものを完成し得たのであつてこれなら如何なる凡才(？)でも速記に於ての天才には立派になり得られるであらうとの自信を得るに至つた次第であつて敢て誰にも出来る速記術と天下に呼號して憚らぬのである、而して最新應用速記術に對する自分の考案は要するに指頭の働きを緩和し發音の緩急に對する文字の配列を密接圓滑にし記憶に難澁にして且つ融通の利かない略字主義を排し如何な

る言語の變化にも應じ得る様系統的な而も頗ぶる簡単な省略法によつたもので従つてこれによつて手先の器用不器用に拘らず又如何に形容詞澤山な言語文章と雖も容易に速記し得て而も最高速度の發音に堪へ得る事を確信すると同時に省略法が系統的であつて所謂一を聞て十を知り得る様に改修したものであるから其修得の速かにして成功し易い方式である事を斷言するものである現に自分は過般山形自由新聞社の計畫に賛し速記術短期講習會を開催したが僅々二週間の講習によつて會員何れも其真髓を會得し大に斯術の簡明なるを讚嘆したのであつた。會員中齋藤通信書記の如き電信符號の修得よりも容易であると説明して居るのであつて自分もいよく速記術普及の敢て難事にあらざる事を確信し得るに至つたのである。速記術は斯くて頗ぶる簡單で成功し易い技術となつて居るに拘らず未だ汎く普及されて居ないのはどういふ譯であらう、一般に實用的に普及されて

居ないばかりでなく速記とはどんなものか見た事もなければ聞いた事もな
いといふ人も随分ある、自分は常にこれを遺憾に思つて居ると同時に速記
術はこれを是非とも士農工商各階級を通じて社會一般の人に普及し各人を
して日常の實用に供せしめたいものだと思つて居るのである、然らば速記
術と云ふものは如何なる働きをするもので又如何なる場合に使用さるべき
ものであるかと云と其應用さるべき範圍は實に宏大無邊であつて一口には
云ひ盡せぬのであるが現今最も多く使用されて居るのは國會府縣會と新聞
通信社である、國會は即ち貴族院と衆議院であつて百般の國政を議する際
各國務大臣の演説も議員の發言も皆速記者によつて一言一句速記され直に
これが議事録となつて國民一般に發表されるのである、府縣會も同様其府
縣政の論議を一夕速記者によつて速記されて居るのである、若し議會に速
記者が居かつたら國民は直接自分の生活に關係を有する各種の法律や豫算

其他國政百般の討議の模様とか又は自分等を代表して國政に參じて居る議員が議會に於て如何なる發言をしたかといふ事も詳細に知る事は出來ぬのである、又新聞通信社に就て見るとこれ亦速記者の活動は實に目覺しいものであつて全國の新聞通信社から速記者を除き去つたならば新聞紙は忽ち或意味の白紙と化して仕舞ふとまで云はれて居る位である、新聞通信社に於ける速記者の任務は電話速記と訪問速記との二方面に大別されて居るが電話速記の方が最も重要なものであつてこれは新聞社に對して各地方から記事を送つて來るのを速記するのであつて中央地方とも電話の通じ得る限り同様であるが殊に東京を中心として全國各地方所謂地方新聞に於ては是非とも速記者の力に俟たなければ權威のある新聞は造る事が出來ないのである、何となれば日々各家庭を訪れる新聞紙の記事中何々電報とか何々電話と附記してある記事は全部速記者の活動によつて出來たものであつ

て時世の進歩と通信機關の發達に伴ひ各新聞と此方面の記事を最も豊富に最も敏速に掲載する事に常に苦心して居り従つて新聞紙の記事の過半は電話速記によつて埋められて居るのである、故に電話速記は殆ど新聞紙の生命であつて各社とも優秀なる速記者の奪ひ合が始まつて居るといふ様な状態となつて來た又訪問速記といふのは速記者が或人を訪問し其人の意見を速記し新聞に掲載するのであつてこの方面は未だ電話速記程に必要視されて居ないが速記術の發達と速記者の素質の向上と相俟つて漸次利用されつゝあるのである、殊に其意見が國際的反響を起すべき性質のものとか又は反對新聞並に低級なる記者によつて誤傳又は録文曲筆される事を虞る方面の人士は特に記者の來訪に對し速記者の隨伴を要求し又記事に對する責任を尊重する大新聞社等に於ては自ら各一流の記者に速記者を隨伴せしむるといふ傾向が次第に多くなつて來て居るのである、其他速記術は各種の

講演會官廳大會社等に漸次其需用を増つゝあつて殊に最近言論の自由を尊重する様になつてからはこれが取締に任ずる司法警察方面になつてはならぬものとなつて居るのである、これ等は何れも代表的大口の利用方面であつて従つてこれ等の需用に應じ其任に當つて居るものは何れも速記者即ち速記術を以て職業として居るものであるが而も未だ速記術の普及が足りない結果と完全にして速に上達し得る速記術が尠かつた結果速記者と名の附くべき即ち職業速記者の数が尠いので現在の状況ではこれ等各方面の無制限の需用に對して應じ切れない状態にあるのである、故に東京大阪等の如き比較的速記者の多く集中して居る所では左程不自由を感じないのであるが一步地方に乘出すと會議とか講演會に速記を附け様としても速記者が居ない仕方がないから遠隔の地から態々呼んで來なくてはならぬといふ不自由を感じて居るばかりか旅費や時日の關係で遂に速記を附

ける事が出来ないといふ結果になり地方文化の發展上非常なる障害を來してゐるのである、斯の如く速記の需用は無制限であり速記は人類の文化生活上必須の技術であるから最早今日に於ては一部職業速記者に頼らず各階級各方面の人が自らこれを修得して其時と場合に應じ隨時隨所に利用しなければならぬ時代となつてゐるのである即ち速記は裁縫術の如く各家庭に於て爲し能ふ限り自ら裁縫し其能はざる場合に職業裁縫師に持つて行くといふのと同様の程度まで普及し利用する必要があるのである、速記術が裁縫術と同様位の程度に普及され活用されたならば速記文字は第二の國字となる時代が來るかも知れない、何となれば速記は普通の假名即ち五十音と全く同一の働きをするもので然も其速に記し得る事は普通の假名に比較すると五六倍乃至十倍にも當つてゐる、例へて云へば普通の日本字は手縫ひで速記はミシン縫位の速力の相違があるからである、そして速記文字の

働きは第一の目的は人の發音を直に書取るにあるのであるが第二の目的として普通の日本文字即ち假名並に漢字に代用しこれと同様に活用し得るか其簡便で重寶な事は一度速記文字を覺へたら時間を急ぐ時とか一寸した備忘録等には普通の文字はまどろしめて使へなくなるのである、然らば速記はどれ位速に記し得るかといふと大抵の演説とか講話は大體の統計によつて見ると十分間の發音が漢字交り文に直して遅い人で一千七八百字最も速い人で二千二百字といふ事になつてゐて速記の速力も矢張りこれと相伴ふてゐる、又先に述べた新聞社の電話速記に就て見れば電話は一通話が五分間と定まつてゐるが其五分間に速記する新聞記事は普通十五字詰七八十行から百行位までを以てまづ一人前の速記者の書程度とされてゐるこれは何れも漢字交り文に直した字數の計算であつて假名ばかりに直した大變な數字になるのである、今一つ電話速記と電信とを比較して見ると

電信技手の發信し得る程度は一分間に假名八十字から百二十字位のものであるといふから之を新聞記事に直して見ると一行が假名二十二字位になつて居るから一分間に四行強から五行弱即ち五分間に二十行から二十五行位にしか當らないのであつて其速度に於て大變な差があるばかりか經費の點に於て莫大な違がある、速記はこれ位の速力を有して居るのであるから初めて速記を見た人は殆ど人間業ではない位に驚き従つてとても普通の人間の出来る仕事でないと言つて仕舞つてんで研究して見様ともせぬのであるがこれは大變に間違つて居るのであつて速記術位簡單なものはないまづ第一に記憶の方面からいつて見ると速記の基礎文字は五十音の假名文字と同様であるが假名文字は文字が夫々異つて居るばかりか片假名平假名變體假名と同文字が三通もあるに反し速記文字は唯一種類であつて而かもカの字を覺へれば直にキクケコと覺られサを覺へればシスセンと直に連想さ

れる様に出来て居るから五十音全部を記憶するに殆ど一時間もかゝらぬのである、そしてこの基礎文字が根本になつて種々の言葉が組立てられるのであるから速記術の内容を見た人は其簡單なのに二度吃驚するのである、右の如く速記は普通の假名文字と同質のもので而も頗る簡單で記憶に速でそして輕便重寶な技術であるからこれを習ふ事は別にたいした學識もいらねば明敏な頭腦もいらないのであつて小學校の卒業生は小學卒業生だけに大學卒業生は又それ相當に自分の智識の範圍に於て應用すればよいだから各人とも是非とも一度は研究して見る必要があるのであるとして一度研究し始めたらこれ位興味のあるものはなく不知不識の間に上達して官吏といはず商人といはず教師も學生も男も女も各其能力を數倍加せしむる事が出来るのである。

速記術の應用される範圍は前にも述べた通り人の發音を寫す場合は、演説

講話、電話、講談、落語から都々逸、端歌の類に至るまで凡そ人間の發音即ち言語によるものである限り、時と場合を論せず使用され第二の普通文字に代用する時は手紙の文句から手帳の端まで即ち普通の文字の使はる範圍に於て最も輕便に利用されるのであつて速記を覺へた人の利益といふものは有狀無形に實に莫大なものがある而も之を職業として世に立つならば果してどれ位の地位と收入が得られるであらうかといふ事を一寸述べて置く必要があると思ふが順序として先づ第一に最も多く使用されて居る方面に就いていつて見ると議會即ち貴族院と衆議院には各一人宛の高等官が置かれて居る、これは速記士といふ名稱になつて居る、そして其下に各二十九人の技手即ち判任官を置く事に官制で定められて居る、これ等の俸給は現在では七八十圓から百二三十圓であつて餘り多額とは云へないが議會は例年一會期が三ヶ月であるが年末年始の休會期一ヶ月を控除し正味僅々二箇月勤務

するだけで俸給は年中貫つて居るのであるから比較的割のよい商賣である、
 而もいよいよ議會開會となると官制上定められた技手だけでは足らぬか
 ら臨時雇として多くの速記者を使用するのである、次は府縣會であるが府
 縣會は例年一會期約一箇月であつてこれは其府縣によつて一定して居ない
 様であるが大抵千圓から千二百圓位出して居る様である現に宮城縣の豫算
 を見ても速記料は千五十圓と計上してある、又區市郡會等のも其會期の長
 短にもよるが大抵これを標準として割出されて居る、又諸種の演說會とか
 講習會、銀行、會社の總會とかの速記は何れも時間によつて計算するので大
 抵一時間十圓以上十五圓といふ事になつて居り而も假令廿分でも卅分でも
 一時間として計算するのが通例になつて居る、それから新聞通信社である
 が速記の需要は現今この方面が最も必要視されて居るだけに電話の通じて
 居る限り各社とも二三名乃至十數名の速記者を社員として招聘し報道の敏

速に努めて居つて各其社の財政状態と速記者の腕によつて相違はあるが一
 箇月の俸給は七、八十圓から二三百圓といふ所が相場である、而も七八十圓
 といふ所はほんの見習ひ格のもので又銀行、會社、大商店等にも近時速記
 者を社員として常置する傾向となつて來たがこれ等の俸給も新聞通信社と
 大差はない、そして速記者の最も必要なのは地方新聞であつて従つて報酬
 も主筆や編輯長と同額若しくはそれ以上を支給して居り従つて速記者の地
 位も決して低いものではない、速記を職業とすれば大體右の標準によつて
 待遇されて居るのであつてさして莫大な収入が得られる譯でもないが近時
 財界の不況其他の關係で大學や専門學校の卒業生が僅々四五十圓の俸給で
 而も本年度の卒業生等は就職口がないので過半數のものは其方途に迷つて
 居るとの事である、これに比べると速記は其需用が益々増加され又其仕事
 が文化的で紳士的であるだけに生活の安定からいつても地位から云つても

餘り割の悪い職業ではないのである、殊に速記は女子の職業として好適の

ものであつて最近女子速記者が増加し各方面に活動して居るのは時代の進歩として誠に喜ぶべき現象である而も速記者は學歷によつて採用されるものではないから小中學卒業生にして専門學校出身以上の學歷を有する人士間に立つてよく其地位を維持し立派に活動し得られるのである、なほこれを職業とする事によつて不知不識の間に頭腦を緻密明晰にし時勢に通曉し常識を發達せしめ文筆の力を養ふが故に速記者としてよりも寧ろ新聞記者又は著述家として名を成し或は新聞社長たり編輯長たる人も少くないのであつて速記は實に青年男女成功の扉を開く鍵と云はれて居るのである。速記術が其修得の容易である事は前述の通りであるが速記文字の働きは第一の目的としては人の發音を直寫即ち其儘書寫すにあるが第二の目的として普通の日本文字に代用しこれと全く同様に活用し得るもので一歩進め

てこの速記文字を以て國字としたならば目下頻りに論議されて居る漢字制限とかローマ字論乃至學年短縮論等は殆ど痴人の夢と化す時代が來はしまいかと思れる、自分は速記術を普及する第二段の目的として速記國字論を天下に公表し、やがて識者の批判に訴へん事を期して居る本著書に對しては既に赤司文部次官から懇篤な序文を送られて居るが其一節にも速記國字論に關する余の主張に對し或程度の諒解を得て居るのであるこの國字論に對する余の信念と抱負と主張とは他日に譲り茲で一吋參考のために速記術の歴史沿革に就て簡単に一言して置きたいと思ふ、まづ順序として歐米に於ける速記術に就て見れば實に今を距る二千餘年前羅馬隆昌の時代マークス、タルリアス、キケロといふ雄辯家があつて盛んに自己の政治的意見を高唱しつゝあつたが偶々時の執政官の忌諱に觸れ難を避けて希臘、アゼン

門人チロと呼ぶものが一種の略記法を發明しキケロの口演を筆記して汎く頒布したのであつた、これが即ち世界に於ける速記術の濫觴を爲した者であると言はれて居るが其後紀元前四十三年キケロが遂に虐殺の運命に墮れ悲壯なる最後を遂げると共にチロの畧記法も亦空しく埋没されて爾來中絶の姿であつたが紀元一千五百八十八年に至り英國の古物學者ドクトル、チモシイ、ブライト氏が其研究中偶然にもチロの畧記法を發見し其有益なる方式なるに感じ之れを基礎として自ら苦心研究の結果茲に又一種の畧記法を編成しキヤラクテリーと命名して其書籍を公けにしたこれが動機となつて爾來幾多の學者によつて速記術なるものが専門的に研究せられ遂に往古の畧記法は全言語を一言一句の脱漏なく直寫即ち其儘書寫す事の出来る今日の速記術となつて現れたのであつて今日歐米諸國に於ては二百五十餘種の流派を算するに至つたのである然し其中歐米速記界の最も功勞者であ

り中興の祖ともいふべき人は彼の有名な英國のアイザックピットマン先生であつて紀元一千八百三十七年（我天保八年）在來の速記術に一大改革を加へ記音的線狀筆記法なるものを發明し大に名聲を馳せると共に著書に學校にこれが普及宣傳に努力した結果期年ならずしてピットマン式は歐米全土を席捲し其功績により氏が八十一歳の時英國ビクトリア女皇からナイトの榮爵を賜つた程である 翻つて我日本に於ける速記術の歴史を見るにこれ亦意味筆記即ち要點のみを記す畧記法は僧侶社會其他古代より行はれて居たのであるが未だ見るべき何物もなかつたのである所が明治十五年に至り岩手縣人田鎖綱紀先生が記音的速記術を發明された、これが抑も我國に於ける速記術の源泉を爲すものであつて爾來幾多の人士によつて改修は加へられて今日に及んで居るのであるが我國速記術の發明者は田鎖先生であつて先生の功績といふものは實に偉大なものである、故に政府はこの功勞

に酬ゆべく明治二十二年勅定の藍綬褒章を授け越て二十九年二月帝國議會

は全院の決議を以て氏に年金を贈るべく政府に建議し遂に容れられたので

あつた、爾來幾多の人士によつて種々の速記術に關する著書も發刊せられ

或は教授所等も設けられたのであつたが未だ以て見るべき發達を遂げ得な

かつたのである。

斯して我國の速記界が萎靡不振の状態にある時に當つて突如として出現し

た速記術は即ち本應用速記術の根本を爲して居る熊崎式速記術である、斯

術の發明者熊崎健一郎先生は自分の最も敬服して居る人格者であつて現に

東京時事新報社の幹部として令名がある、熊崎先生はもと教育者であつた

が速記術が文化の先驅として發達すべきものである事を痛感され苦心研究

の結果例へば從來の速記術の文字が複式であれば熊崎式は單式であつて其

文字が複式の一文字に對し二文字以上の働きを爲し而も本式獨特の縮字法

により運筆の輕快と速度の高速を圖り數字速記法其他我國速記界の一大革命ともいふべき速記術を發明せられたのであつてこれは明治三十六年盛夏の候であつた次で先生は明治四十年二月最新熊崎式速記術なる著書を公けにせられ其他幾多の著書によつて獨習不可能とされて居つた我速記界に一大光明を與ふると共に翕然として先生の門に走るもの續出し忽ちにして熊崎式速記術は斯界を風靡し盡さんとする一大勢力を占むるに至つたのである、自分は先生の寵愛を蒙る事深く常に慈父に對する念を持つて師事して居るものであるが然し先生に親しく手をとつて教授されたのではな

くて先生の著書によつて獨學獨習したもので速記が獨學によつてもよく成

功し得るものであると共に先生の式が如何に簡便であり如何に偉大な發明

であつたかといふ事を自ら雄辯に證據立得るのである、而も從來速記術が

往々にして鎖國的であつたに對し先生は當初から開放的であつた事も我國

速記術の發達史に牢記すべき功績であると云はなければならぬ、而して自分
分は明治四十二年來熊崎式速記術によつて速記者生活を送つて居るもので
あるが最初我國二大通信社と稱せられて居る日本電報通信社に入り居る事
滿三箇年にして河北新報社の招聘に應じたのは風寒く雪凍る大正二年二月
の事であつた時恰も内は閣族打破憲政擁護の叫び凝つて例の不祥なる焼打
事件となり、次で内閣の再更迭等の事あり時局は紛糾に紛糾を重ね外隣邦
支那に於ては彼の中秋月の夜武漢の一隅に突如として第二革命の烽火は
舉られ歐洲の風雲は益々急にして世を舉げて不安と恐怖と焦燥にざわつい
て居た時であつた、越へて大正三年血に渴し肉に飢たる塞耳比一青年の魔
手によつて投せられた爆弾は遂に歐州全土を戦亂の巷と化し我國亦に之が
渦中に投じて青島戰の幕は切て落され全世界將に砲煙彈雨の焦土と化さん
とするに至り従つてこれが報道の任にある新聞社の活動といふ者は實に目

醒しいもので殊に東北唯一の大新聞と稱せられて居る河北新報社にあつて
は毎日毎夜數回の號外を發行して其報道の敏速と正確を期したのであつ
て之が直接の責任者たる自分は殆ど不眠不休の日が幾回となく續いたので
あつた斯くして自分は歐州大戰の最初より平和克復の最後まで河北社にあ
りて殆どよく一人の力を以てこれが重責に終始し得たのであるが大正八年
帝國通信社仙臺支局の開設と共に轉じて之が支局長となり大正十年前宮城
縣知事故森正隆氏の新東北新聞創設と共に入つて編輯の人となつたのであ
る、其間自分は有ゆる劇務と戦ひつゝ速記術の改良と普及を企圖し漸く自
分の存在は斯界に認めらるるに至つたので獨り自ら満足の情に堪へ得なか
つたと共に斯術を普及する事によつて我國の文化といふ者が益々發達すべ
き者である事を信じよいよ茲に自分が苦心研究の結果發明考案せる斯術
の藍輿全部を披歴し斯く獨習書として公刊すると共に自ら身を以て其天職

の奉すべく決心した次第である、然も斯術の普及を企てたる以來の自分に
 は揣らざる障害と壓迫が前途を覆ひ幾度が暗黒の岐路に立て其方途に迷さ
 れ幾度か失望と落胆の淵に呻吟した事であつたらう然れども今や黎明の空
 朗かにして余の抱負は將に實現されんとし余の固き信念と主張とは將に貫
 徹の域に向て進みつゝある事を顧み獨り自ら歡喜の情禁する能はず自分は
 これによつて愈々自己の重責に感し士農工商各階級を通じて斯術を修得應
 用せしめん事を庶幾し殊に小中學生より普及する事によつて學年短縮の間
 題も自然に解決し通信事務に應用しては電信電話の輻輳を緩和し警察又は
 裁判に應用しては事務の敏活と親切公平なる裁決に資し實業方面に普及し
 ては商取引の敏活と經濟とを圖り大は國費の輕減より小は各人の能率を増
 進せしめ都鄙文化の平衡に資せんとするものであつて速記術は今や文化生
 活上各人必修の技術である事を再び高唱斷言すると共に余の計畫に對し
 て寄せられた各方面の激勵の辭と關係者諸君の勞を謝す。

目次

第一、速記文字の割出..... 四
 第二、基礎文字..... 六
 基礎文字表..... 七
 基礎文字應用例..... 一
 第三、變則基礎文字..... 一四
 變則基礎文字表..... 一五
 變則基礎文字應用例..... 一六
 第四、濁音の書方..... 一七
 濁音文字表..... 一八
 濁音文字應用例..... 一八
 第五、鼻音の書方..... 二二
 鼻音文字表..... 二三
 鼻音文字應用例..... 二三
 第六、長音の書方..... 二四
 長音符の應用例..... 二五

第七、拗音及半濁音	二六
拗音半濁音連綴例	二六
變則拗音文字	二七
變則拗音連綴例	二七
第八、促音の書方	二八
促音文字連綴例	二八
第九、縮字法	二九
縮字符號表	二九
縮字符號應用例	三〇
鼻音の縮字例	三〇
拗音縮字例	三一
促音縮字例	三一
第十、復語の書方	三二
複語疊字符號と應用例	三二
第十一、肯定否定法	三三
肯定線と其應用例	三三
否定線と其應用例	三四
第十二、語尾接續詞略字	三六

語尾接續詞略符號表	三六
第十三、數字の速記法	三七
數字速記符號表	三七
數字速記應用例の一	三八
數字速記應用例の二	三八
數字速記應用例の三	三九
第十四、片假名早書法	四〇
片假名早書符號表	四〇
片假名早書應用例	四一
第十五、加點省略法	四二
上下加點應用例	四二
「ネバ」の省略法	四三
第十六、一般的略字と用法	四四
略字符號表	四四
以上の法則應用速記例	四五
第十七、變則縮字	四五

附 錄

變則縮字の一と應用例	一九
變則縮字の二と應用例	二〇
變則縮字の三と應用例	二一
變則縮字の四と應用例	二二
第十八、角力記事の速記	二七
角力略符と應用例	二八
第十九、相場記事の速記	二九
相場略符と應用例	三〇
第二十、初學者のために	三一
速記と用具	三一
練習の順序	三二
臨機の省略法に就て	三三
◎全法則を通じての速記例	三四
以上	

最新應用速記術

櫻井郷三講述



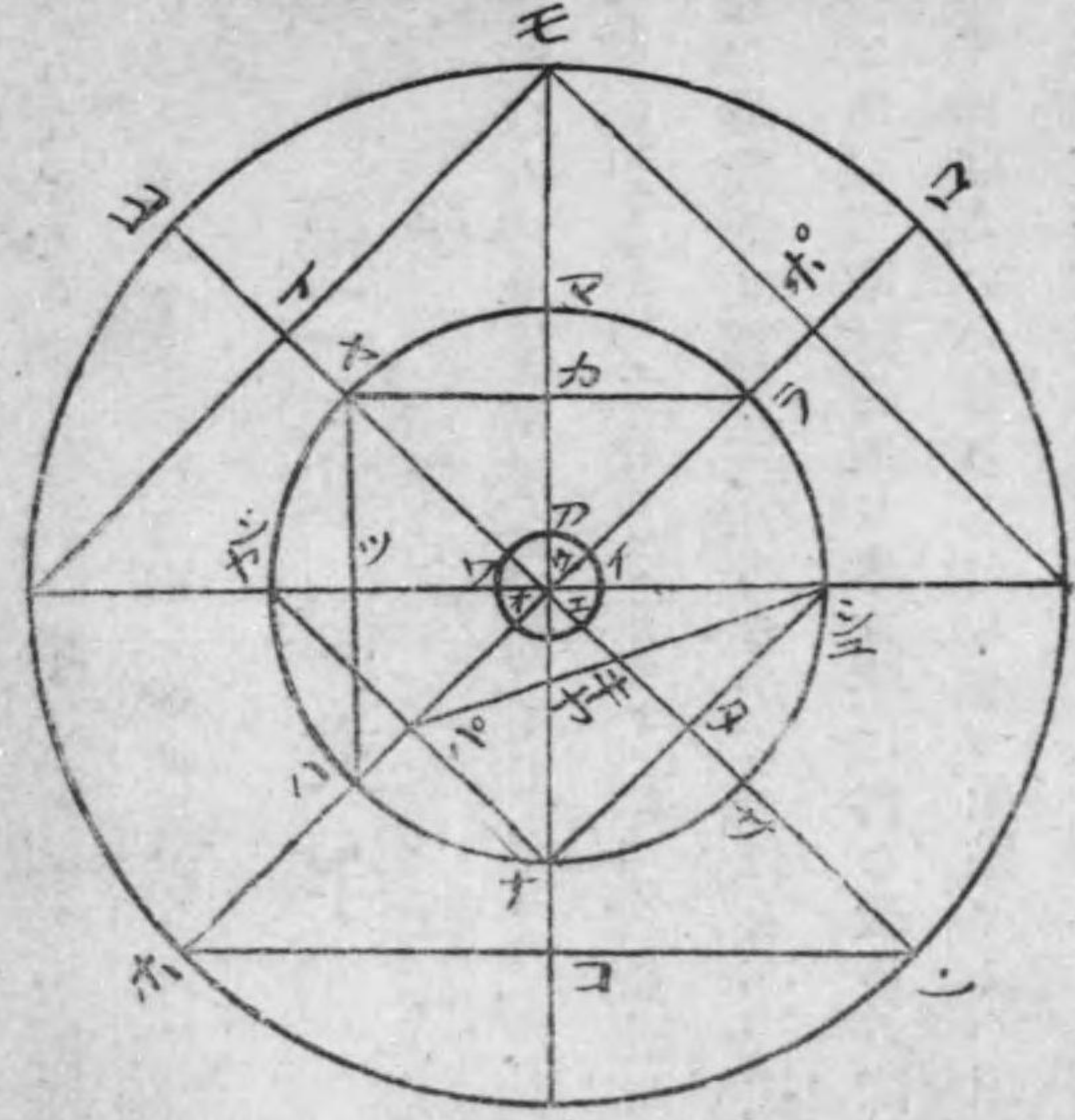
緒言

本應用速記術は其基礎文字其他大體の方法に於て、現今我國速記界に於て最優越の地位を占めて居る、熊崎式最新速記術に源を發し、これに自分が過去十餘年間の速記者生活に於ける經驗により、其長を採り短を補ひ、尙内外幾多の速記術を参照して適切なる改修を加へたものであつて、有ゆる複雑なる言語又は文章に對し頗る簡便に應用し得而も其速力に於て最大可能性を有する點に於て、將た又一言一句微細なる點に亘り完全に速記し得る事に於て、最も嶄新なる方式である事を信するものである。速記術とは讀んで字の如く速かに記す術であつて寫言術即ち言葉の寫眞術とも云はれ

て居り、人の發音を其儘書き寫す技術であるから其記號が餘りに複雑であれば運筆に難澁を來たし勢ひ略字(後段に於て説く)を多く使用しなければならぬ、略字は恰度漢字の如き性質と働を有するものであるからこれに頼るに於ては殆ど限りが無い計りか速記符號の連綴上非常な障害を來たし、高速度の速記に應ずる事が出來ず徒らに勞力を費し精神を消耗して而も幾多の弊害を伴ふものである。又極端に簡單なる記號を使用すれば、大體の意味に於ては間違はなくとも原語原文と照合した時幾多の誤謬を發見し速記術其物の眞價を疑はれる場合が尠くない、又速記術は手で書くものでなく頭で書くものだとその意見もあるがこれも程度の問題で速記術は記憶術ではなくて一定の符號を以て言語文章の一言一句を書寫するのであるから所謂手先の器用不器用により運筆上大なる相違のある事は事實である。一の定められた記號であつても甲の人と乙の人とでは其運筆の關係上同一速度

を以て現す事は出來ないのである、故に自分は此等の點を深く研究した結果基礎文字は熊崎式ではあるがこれに實際的應用方面から幾多の改修を加へて自ら非常に満足な結果を得たのみでなく幾多の人に就て試験したる所從來十中一二の割合にて成功者を出せば好成绩であるとされ居た速記術が殆ど其全部成功し剩へ其成功期間に於ても從來の記録を破つて居る事を確め得たので獨り會心の歡に堪へなかつたのである。而して此法式に依れば在來の諸式に於て見るが如き幾多の弊害を除き得て而も所謂手先の器用不器用に拘らず或程度迄は各人共に高速度の速記に堪へ得るに至る自信を得たのでこれを汎く發表し先輩諸彦の批評を乞ひ併せて斯術を研究せんとする一般人士に對し最も難事とせられて居る斯術の蘊奥を披歴しこれが修得に便せんとするものである。なほ講述に當り學術的の解説とか又は自分の考案に就て一々説明する事は却て修術者の頭腦を疲勞せしめ難解の嘆を發

速記文字割出圖解



なるから左の圖解に就き以下講述する所の基礎文字其他を照合し一通りは研究して置く必要があるのである。尙これは熊崎式速記術割出法であるが唯熊崎式にありては「キヤ」は短線を以て充當せられあるも本應用速記術に於てはトの線を以てこれに代へたるため本圖解即ち熊崎式割出によるキヤの線は省く事になる、これは熊崎式のキヤは短線なるも本式は長線を以てした関係によるも

せしむる虞れがあるからこれを省略し最も簡明に而も最も平易に實際的方面のみに就いて卒直に講議を進めて行く事にする。

第一 速記文字の割出

本速記の記號（文中速記文字又は符號と稱するも皆同じ）の割出は大中小三個の圓型を幾何學的に分解し母音父音子音並に拗音となるべき、都合三十個の各異りたる直線、斜線、孤線を得而して我國の言語組織上最も多く使用せらるゝ語音に對しては最も速かに記し得べき線を充當し、なほ右三十個の各線を基礎として本速記文字を割出したものである、而しこの割出は速記術其ものゝ日常應用上には大した關係はないから詳細なる説明は省略するがこの原理を理解して置かなければ速記文字の傾斜角度等が不明瞭

のである。

第二 基礎文字

速記術は人の發音其儘を書寫するものであるから普通日本文に於けるが如く「イ」も「キ」も「エ」も「オ」も「ワ」も區別する必要はない、又「君は」と云ふ時發音は「君ツ」であるからこれも亦「は」を用ひず發音通り「わ」と書くのであつて唯翻譯即日本文字に書き改める際に文法上誤りのない文字を使用すればよいのであるからまづ此點をよく理解して置く必要がある、そして基礎文字は假名の五十音と同様であるが前にも述べた様に「イ」と「キ」の如きは共通に使用するものであるから「ヤ」行の「イ」と「エ」と「ワ」行の「キ」「ウ」「エ」「ヲ」は左に掲ぐる基礎文字表に於てはこれを省略する。

欠

欠

基礎文字

右に示した基礎文字が速記術全體の骨子となつて有ゆる言語文章が組立てらるべきものであるから、先づ第一にこの基礎文字をよく記憶して大小長短並に直線孤線を最初から明かに區別して練習して置かぬと取返しの附かぬ弊害を貽すから吳々も細心の注意が必要である、最も文字の大小は各人の適宜であるが標準が既に割出方に於て定つて居るのであるからこの標準は絶対に動かす事の出来ないものであつてア行(即ち母音)の倍の大きさがカ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、各行の三段まで例へばカ行なれば「カ」「キ」「ク」までがア行文字の倍の大きさとなり四段と五段即ちカ行の「ケ」「コ」がラ行の「レ」「ロ」までは又其倍の大きさとなるのである、要するに「ア」の倍が「カ」「カ」の倍が「コ」(以下同じ)と云ふ順序になるのである、なほ右の基礎文字の表中に「ウ」の所に「ー」と二つの符號があるがこれは運筆上、下に續く文字との連続に便利のよい方をどちらを使つても差支へな

基礎文字連綴例 (一)

愛 家 浮く 桶 打つ 朝

3. 2 L L 7 ✓

會期 記憶 倉敷 結末

~~~~~

唐草 寶 巷 築山

~~~~~

寺島 手荷物 徳島

~~~~~

晒 阪本 阪谷 氣質

~~~~~

日註

本書中の速記文字其他一切の記號は四六版中に挿入するものとし
ては些か大に失するも之は初學者のため特に文字の標準を示した
ものであるから實際上大体この位の大きさにて練習すれば宜しい

いのである、例へば「ウカ」と書く場合は「」とし「ウツ」と書く場合は「」
と云ふ具合に使い分けをするのである、又直線と孤線に注意を望むのは
「カ」と云ふ文字を記す時に少し曲ると「ナ」と紛らはしくなりナ行とハ行マ
行とラ行等も傾斜に注意せぬと間違が起るから最初から嚴密に區別して練
習する必要がある、又初學者の爲に特に言て置くが速記文字は歐文の如く
左から右に連綴するもので決して日本文字の如く縦に綴つてはいけない。

基礎文字連綴例 (三)

秘密	平島	枕	認む
昔	矢鱈	許し	豊
落札	力士	留守居	歴史
露西亞	私	都	新らしい
田鎖	熊崎	櫻井	

基礎文字連綴例 (二)

併し	知合	鯨屋	すこし	助く
世界的	瀬戸内海	恐ろしき		
中村	習志野	菜種		
錦	抜道	ぬらくら		
派出	畠	走る	箱根	

變則基礎文字

サ	シ	セ	ソ
ノ	ノ	ノ	ノ
タ	チ	テ	ト
ノ	ノ	ノ	ノ
ヤ	ユ		ヨ
ノ	ノ		ノ
オ			
ノ			

第三 變則基礎文字

變則基礎文字と云ふのは恰度前に述べたウの使分けの如きものであつてア
 行の「オ」とサ行タ行ヤ行に限り上から筆を持って行つても亦下から持て行つ
 てもよい様に文字の連綴と運筆上都合よく造られたものである即ち本則
 は「オ」の文字は左上から右斜下みぎなめしたにサ行は下から右斜上みぎなめしたに筆を運びタ行は上
 からヤ行は下からであるけれどもこれを變則として上下何れよりも記す事
 が出来るのである但し變則であるからよく他の文字との連綴が圓滑に
 行かない場合限つて用ふるもので無暗と使用しても弊害が起るから深く
 注意せねばならぬ、そして「サ」「タ」「ヤ」各行とも全部の文字ではなくて唯
 左に示す三、四文字宛に限るのである。

濁音と云ふのはガギグゲゴ、ザジズゼヅといふ具合に音の濁つて發せられるのを云ふのであつて「カ」「サ」「タ」「ハ」の各行何れも濁音に變ずるのであるがこれは普通の日本文字に於て濁點即ち加點に依て變せしめて居ると同様に速記文字に於ても上部若くは其横に加點するのであるが唯日本文字では二個の小點を打つが速記文字に於ては唯一個の加點に依て濁音に變るのである、即ち左の通りである

田ありミ雖も之を耕さざれば則倉廩空し

(白樂天)

變則基礎文字連綴例



御無沙汰 土木 怒鳴る 出来過

Handwritten cursive characters for 御無沙汰, 土木, 怒鳴る, 出来過.

大事 厳し 出来合 沙漠 化かす

Handwritten cursive characters for 大事, 厳し, 出来合, 沙漠, 化かす.

牛酪 壁 株式 荷車 義賊

Handwritten cursive characters for 牛酪, 壁, 株式, 荷車, 義賊.

茲で一寸注意して置くが、前にも言た通り速記は發音其儘を寫すものであるから清音に於て「イ」と「キ」の區別のないと等しく濁音に於ても「ズ」と「ヅ」「ジ」と「ヂ」の區別は全然 unnecessary である故に「ズ」と「ジ」の方が運筆上便利であるから「ヅ」と「ヂ」の濁音は絶対に使用せぬ方がよい、而して濁音文字が二個以上続く場合は個々別々に加點して居ては

濁音の書方

ガ ギ グ ゲ ゴ

ザ シ ズ ゼ ゴ

ダ テ ド

バ ビ ブ ベ ボ

濁音文字の連綴例

君が代 杉林 是非 儀式

面倒であるから其連続した各文字の中間に一個の加點をすればよいのである、又普通基礎文字と濁音文字が組合くみあはされて一つの語句となる時、例へば「小使こつかい」とか「同地」とか云ふ場合に「コス」と書き直ちに筆を放して其「ス」に加點し然る後あとの「カイ」を書くとき云ふ如く濁音に逢着する毎に其都度一々筆を止めては非常な手数となり速力を阻害する事が甚だしいから「小使」なら「コスカイ」と一句を記し終つて後ちに「ス」に加點し「同地」なれば「トチ」と記し終つて後ち「ト」に加點する様最初から習慣を養ふて置かなくてはならぬ、初學者に於ては動もすれば日本文字と同様一々加點し然る後に次の文字を記す習癖があるから特に注意されたい、なほ濁點は地名、人名等固有名詞的のものに對しては是非とも使用しなければならぬが普通の言語文章に對しては多く其必要を認めないのみか速力を非常に阻害するから速記の熟達じやくするに従ひなるべく省略乃至全廢する様にし常に其習慣を養は

れたいのである。

第五 鼻音の書方

鼻音とは即ち「ン」の附く音で普通の日本文字では獨立の文字として制定され明かに區別されてあるが速記に於ては特に文字として定められては居ないのである、故に鼻音の書方と云ふよりも現し方と言つた方が適當である即ち「カン」と云ふ場合には「カ」の文字の末端を上に向て撥ねる又「サン」と云ふ場合も同様「サ」の文字の端を撥ねるのであつてこれが爲故よゝらに力を入れてはならぬ、唯軽く筆を撥ねさへすればよい、又「せぬ」とか「ならぬ」とか記す場合も鼻音で現して差支ない、なせならば「ありません」と發音した場合でも日本文字に書現す時は「ありませぬ」の方が多く用ひられて居るのであつて従つて「せぬ」と明かに「ぬ」に力を入れて發音した場合にもこれを速記する際は「せん」と書取つてよい事となるからである

鼻音文字連綴例

安閑 慇懃 雲煙 温厚 慘憺

~ ~ ~ ~ ~

廣東 寸斷 君臣 戰端 轉勤 人間

~ ~ ~ ~ ~

亂軍 連戰 半減 憤然 民軍

~ ~ ~ ~ ~

人氣 年間 滿艦飾 面積

~ ~ ~ ~ ~

鼻音の書方

アン イン ウン エン オン

~ ~ ~ ~ ~

カン キン クン ケン コン

~ ~ ~ ~ ~

サン シン スン セン ソン

~ ~ ~ ~ ~

タン チン ツン テン トン

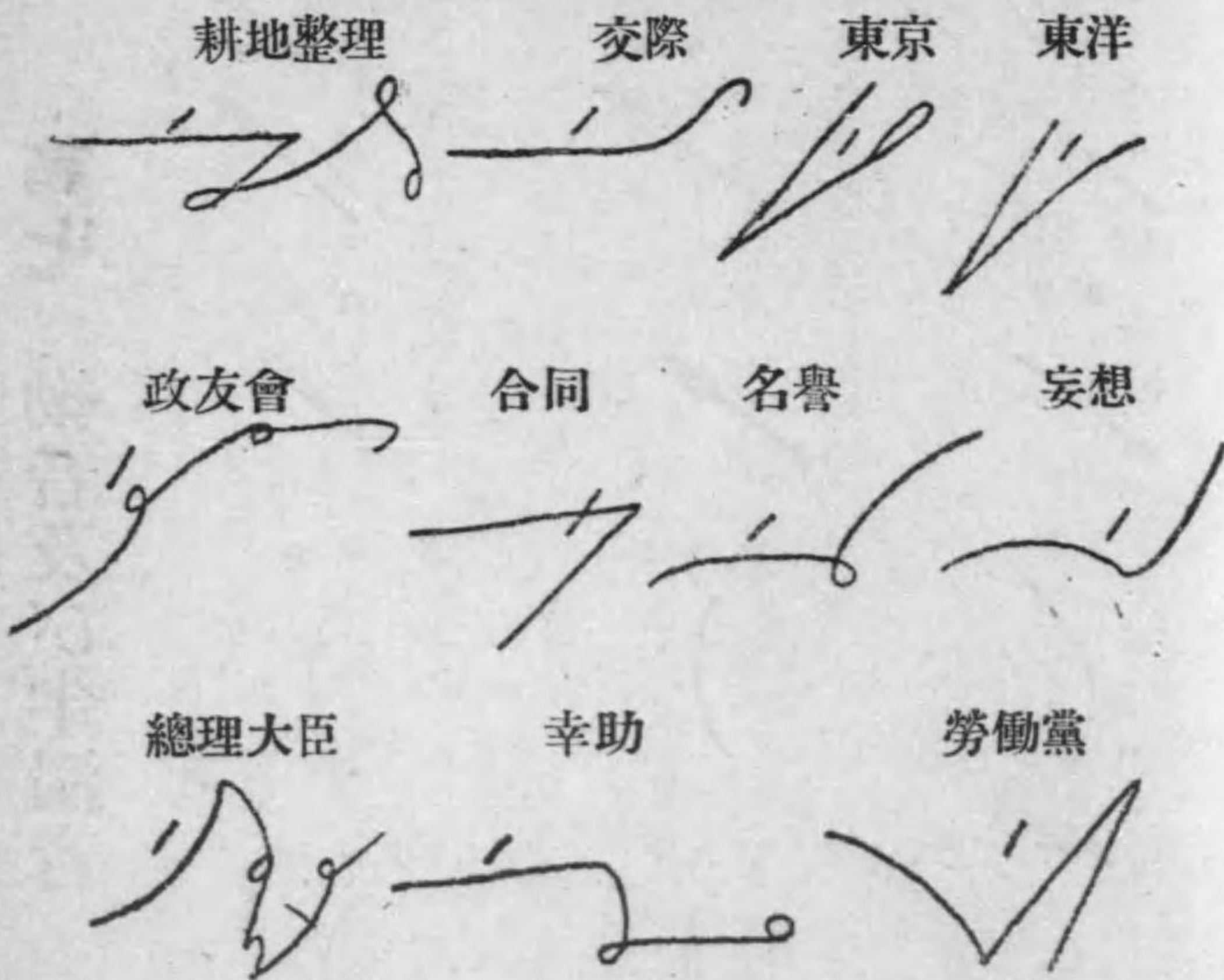
~ ~ ~ ~ ~

ナン ニン ヌン ネン ノン

~ ~ ~ ~ ~

(以下省略)

長音符の應用例



必要を認めぬから漸次省略する習慣をつける事にしたのである。繰返して言ふが右の「幸助」の長音符を省略すれば「小助」となるが其他は全然長音符の必要がないと云てよい總理大臣をソリ大臣とは讀まない、耕地整理も「地七理」では意味を爲さないからである。

第六 長音の書方

これも書き方と云ふよりは現し方で、長音と云ふのは音を長く引く文字又は語句即ち「孝行」とか「交渉」とか云ふ場合がそれであつてこの場合には濁音の方式同様長音符と稱する速記文字の「オ」の字と同型位の點を其文字の上部又は横に加へるのである、然し例へば「同行」と云ふ時はこれを嚴密正確に現さんとするには「ド」は濁音であるからまづ「ト」に加點する必要があり其上長音符を加へねばならぬ、然して「コー」も長音であるから一語句に對し都合三個の加點をしなければならぬ事になつて殆ど繁雜に堪へぬ、斯の如きは實際に於て不可能事であるが故に此場合は一種の便法とし「トコ」と記したる後ち其「ト」の字の中間に長音符を交叉し濁音と長音を一時に現はすのである、然し長音も濁音と同様固有名詞以外に對しては餘り多く其

拗音及半濁音文字 (二)

ヒヤ	ヒユ	ヒヨ		
ビヤ	ビユ	ビヨ		
ミヤ	ミユ	ミヨ		
リヤ	リュ	リヨ		
ビヤ	ビユ	ビヨ		
バ	ビ	ブ	ハ	ホ

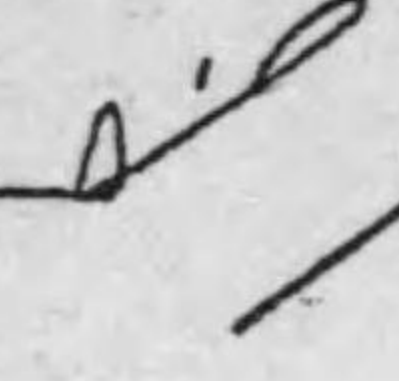
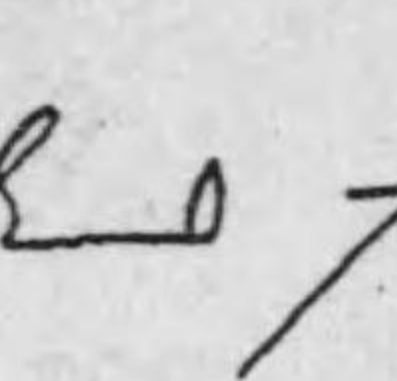
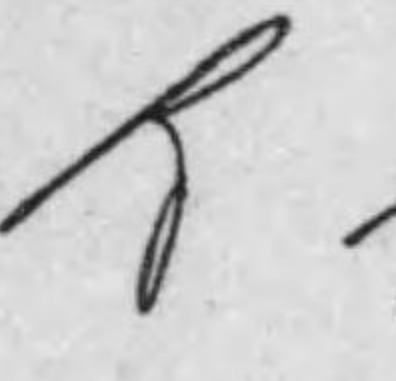

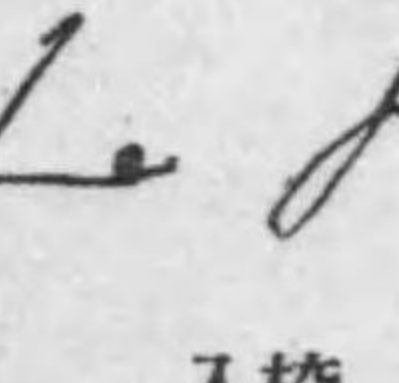

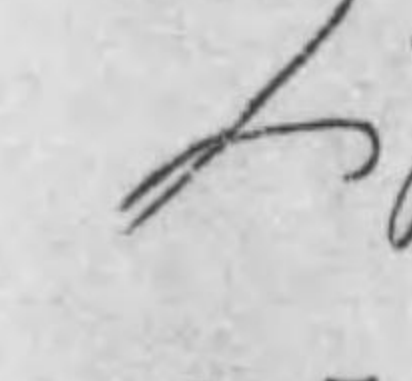
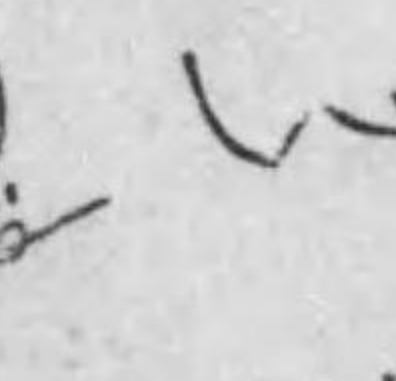
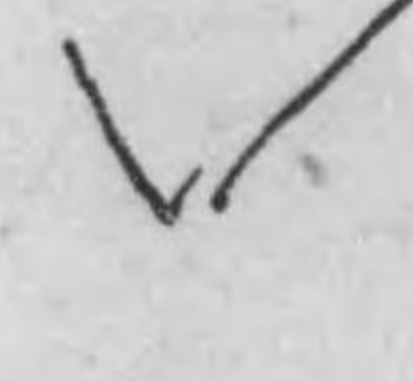

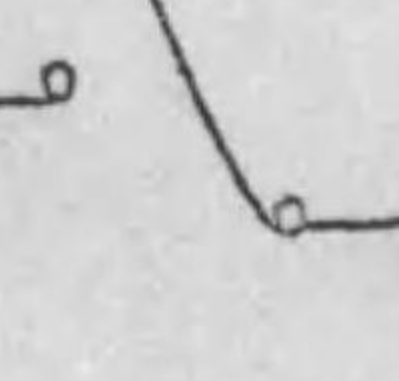
拗音及半濁音文字 (一)

キヤ	キユ	キヨ
ギヤ	ギユ	ギヨ
シヤ	シユ	シヨ
ジヤ	ジユ	ジヨ
チヤ	チユ	チヨ
ニヤ	ニユ	ニヨ

第七 拗音及び半濁音

右の内「キヤ、キユ、キョ」「シヤ、シユ、シヨ」「チャ、チュ、チヨ」の文字は基礎文字に於ける各行の四、五段の文字と同型の大きさに記し「ヒヤ、ヒユ、ヒヨ」は基礎文字の「ハ、ヒ、フ」に加鍵して聊か變型したものであり「ニヤ、ニユ、ニヨ」は「ナ、ニ、ヌ」に「ミヤ、ミュ、ミヨ」は「マ、ミ、ム」に「リヤ、リュ、リヨ」は「ラ、リ、ル」に加鍵して變音せしめたのであるから其大ききも亦之れに従ふものである、又「バビブベボ」はハ行の弧線を直線としたものであつて以上何れも加鍵は濁音の方式に則ればよいのである、而して「ジャジュ、ジョ」と「チャ、チュ、チヨ」とは發音が同じであるから運筆の關係上「チャ、ヂユ、ヂヨ」は一切使用せぬ事にしてある、而して「キユ」「キョ」「チヨ」「シヨ」の四文字に限り變則連綴法が設けてあるから其應用例を左に掲げて置く變則中「チヨ」は正則の「キョ」に紛はしくなるがこれ亦言語の構成上直ちに判讀し得るものである。

拗音及半濁音文字綴連例

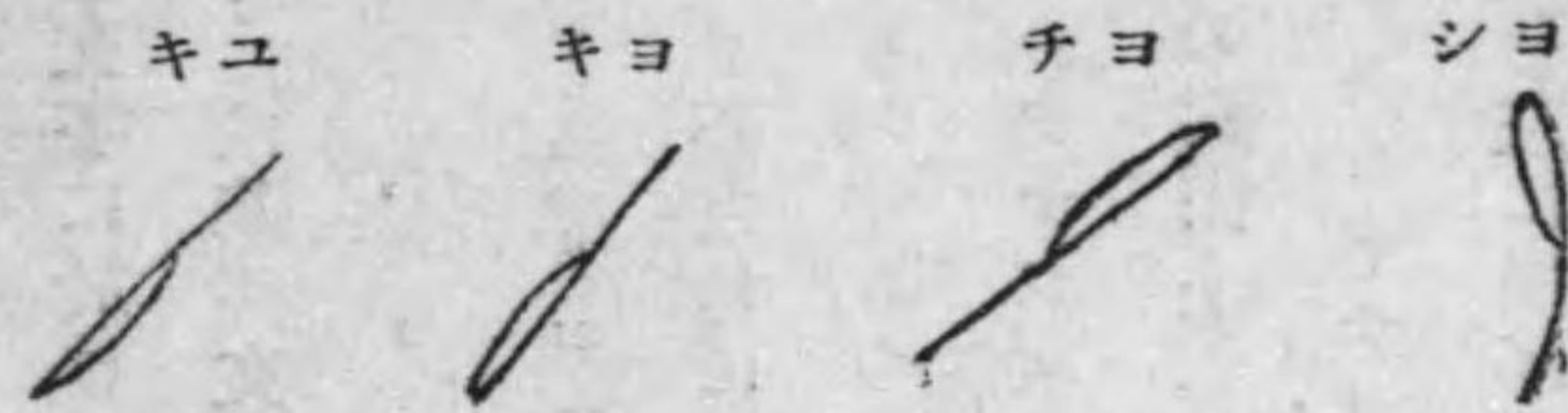
急遽	協調	職業	教育	却下
				
客	急所	京都	修業	寫真 諸所
				
茶ノ湯	忠節	中堅	朝鮮	貯金
				
懲戒處分	盤若	入校	女房	
				
バン屋	バン先	北京	ポンプ	
				

促音と云ふのは「國旗」とか「學校」とか云ふ語音であつて普通の假名で書けば「コツキ」又は「コクキ」となり、「カツカウ」又は「カクコウ」となるのであるが速記の方では何れの場合に於ても促音は全部其發音通り「ッ」なり「ク」の文字を省略して文字と文字を交叉すればそれでよいのである、即ち左の通りである。

凡そ志す所のものを成さんと欲せば必ず成就すべしと
自信して疑ふ勿れこれ成功第二の助なり

(スマイルス)

變則拗音文字



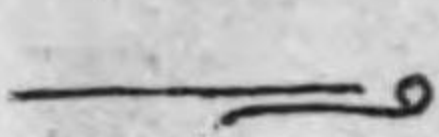
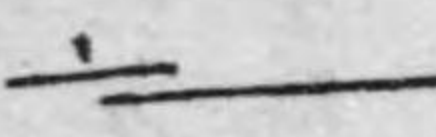

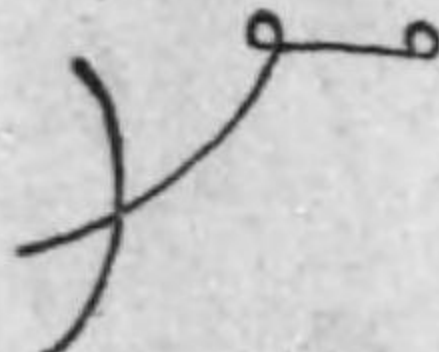

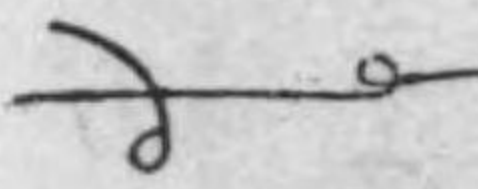


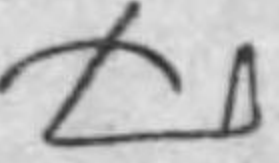
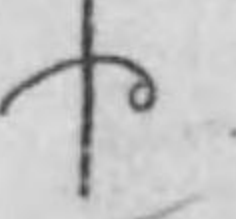
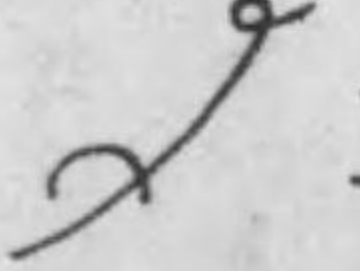
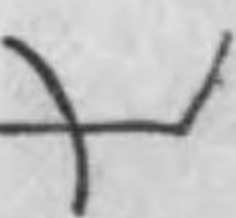
變則拗音文字連綴例



第八 促音の書方

以上の講述により速記術とは如何なるものであるか又如何に簡便重寶なものであるかと云ふ事は略ぼ會得された事と思ふが右の文字と方則が以後説述する所の略字其他の根本となるべきものであるからこれを充分に腦裏に印すると共になほ大なる興味と熱心とを以て今一段の努力を爲さねばならぬ、ところが茲に一つの難關が横はつて居る、それは以上の基礎文字並に種々の書現し方により大抵の言語文章は記し得るのであるが例へば『直ちに』とか『茲に』と云ふが如く夕行なり力行なりの同行の文字が幾多連續する場合に前者は縦に長くなり、後者は横に長くなり而も其文字と文字とが同角度を以て伸びるのであるから接續に困難であつて、各文字の境目が不明となり又一々切り離して記せば運筆上非常に損な計りでなく翻譯の際に紛はしくなる弊害がある、これが爲に變則文字も設けてはあつたが既に變則であるから有ゆる言語文章に對して無制限に應用する事は事實に於て困

促音文字連綴例

國旗	學校	欠席	合體	
				
出席	脱線	鐵砲	陸海軍	
				
立憲	職工	速記術	接伴	
				
日清	全く	納得	卒先	駭り
				
密通	拔劍	厄介	斡旋	樂觀
				

縮字符號

一段縮字	二段縮字	三段縮字	四段縮字	五段縮字
○	◦	◌	◌	◌
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ		ユ		ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ

難であり連続を複雑ならしむる嫌がある故に本速記術に於ては特に至極簡便なる方法が設けてあるのである、而してこれは縮字法と名附けられて居る、この縮字法は一寸理解し難いかも知れないがこれを使用しなければ私の茲に講述して居る熊崎式から發した應用速記術の眞價を現す事が出来なればかりでなく之を實用に供する事も不可能であるから細心の注意と不撓の努力を以て充分理解して置かねばならぬ。

第九 縮字法

この縮字法は前にも言た通り本速記術の骨子ともなるべき肝要なとして重寶な方法であつてカ行なら「カキクケコ」、サ行なら「サシスセソ」と云ふ具合に同行の文字が幾多も連続する場合にこれを應用するのである、即ち左の如き方法である。

力 行 縮 字

一段	二段	三段	四段	五段
○	○	⊥	∩	∪
カカ	カキ	カク	カケ	カコ
キカ	キキ	キク	キケ	キコ
クカ	クキ	クク	クケ	クコ
ケカ	ケキ	ケク	ケケ	ケコ
コカ	コキ	コク	コケ	ココ

右縮字符號に就て説明するに一段縮字符號は各行とも第一段文字即ち「カ
 サタナハマヤラ」の各文字に該當するのである二段符號は一段符號の半分
 位の「○」であつて各行の二段文字即ち「キシチニヒミリ」の各文字を現す符
 號である三段符號は母音の「ウ」の文字を複線としたもので従つて基礎文字
 に縦と横の二種類を制定しあると同じく縮字符號にも二種類あり其應用は
 基礎文字の「ウ」の使分と同様である、又四段符號は基礎支字の「エ」を五段
 符號は「オ」を各複線としたものであつて其傾斜の角度もこれに準すべきも
 のである、而して縮字符號は各行とも其同行文字が二個以上連続して發せ
 られる場合其二番目の文字からこれを應用するのであつてカ行に應用する
 時は縮字符號は直ちに「カキクケコ」となりサ行の場合は「サシスセソ」と變
 ずるのであるが符號其ものは單獨では何等の働きをも爲さぬのである、要
 は各行の縮字例に就て研究されたい。

サ行縮字

一段	二段	三段	四段	五段
○	◦	⊥	◌	◌
ササ	サシ	サス	サセ	サソ
シサ	シシ	シス	シセ	シソ
スサ	スシ	スス	スセ	スソ
セサ	セシ	セス	セセ	セソ
ソサ	ソシ	ソス	ソセ	ソソ

カ行縮字應用例

掲げ	垣根	隠す	可決	
器械	効目	菊太郎	危険	
樵	區劃	區切	括る	苦言
警戒	輕氣球	警句集	迎合す	
警官	經驗	氣候上	狡猾	
飛行機	穀物	後繼者		

夕 行 縮 字

一段	二段	三段	四段	五段
○	◦	⊙	◌	◌
タタ	タチ	タツ	タテ	タト
◌	◌	◌	◌	◌
チタ	チチ	チツ	チテ	チト
◌	◌	◌	◌	◌
ツタ	ツチ	ツツ	ツテ	ツト
◌	◌	◌	◌	◌
テタ	テチ	テツ	テテ	テト
◌	◌	◌	◌	◌
トタ	トチ	トツ	トテ	トト
◌	◌	◌	◌	◌

サ 行 縮 字 應 用 例

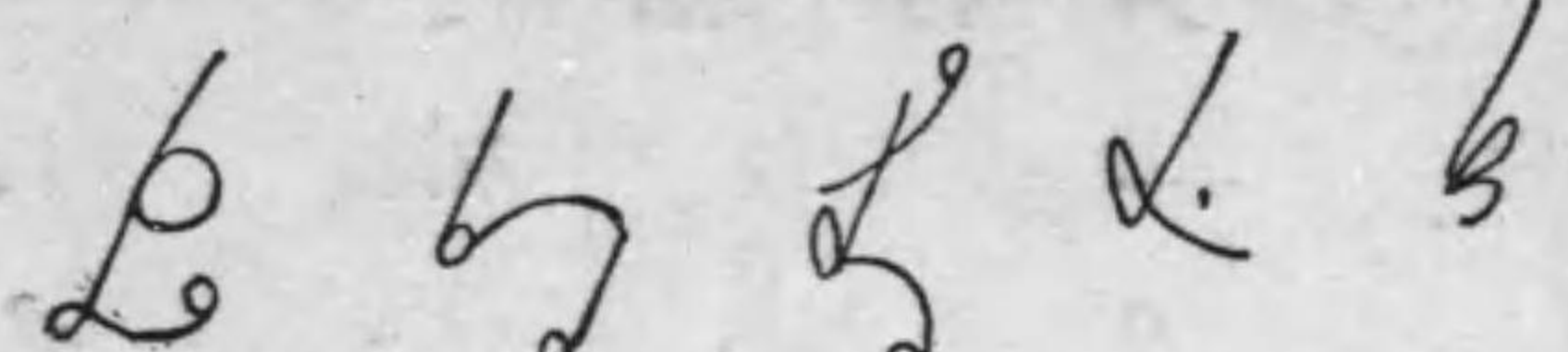
佐々木	座敷	擦り	佐世保	誘はれ
◌	◌	◌	◌	◌
視察	獅子舞	沈む	使節	思想上
◌	◌	◌	◌	◌
荒さむ	鮫屋	鈴木	数隻	裾野
◌	◌	◌	◌	◌
生殺	正式	成績	精選	世相
◌	◌	◌	◌	◌
政策	成算	精神	搜索	
◌	◌	◌	◌	
誹り	蘇生す	奏薦	唆る	
◌	◌	◌	◌	

十行縮字

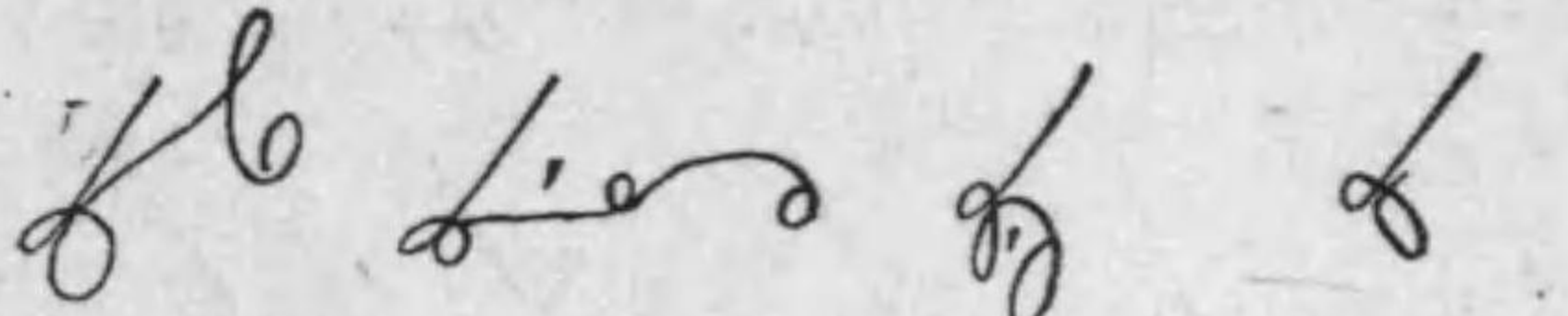
一段	二段	三段	四段	五段
○	◦	⊙	◌	◌
ナナ	ナニ	ナヌ	ナネ	ナノ
ニナ	ニニ	ニヌ	ニネ	ニノ
ヌナ	ヌニ	ヌヌ	ヌネ	ヌノ
ネナ	ネニ	ネヌ	ネネ	ネノ
ノナ	ノニ	ノヌ	ノネ	ノノ

夕行縮字應用例

直ちに 忽ち 執達吏 立場 假令



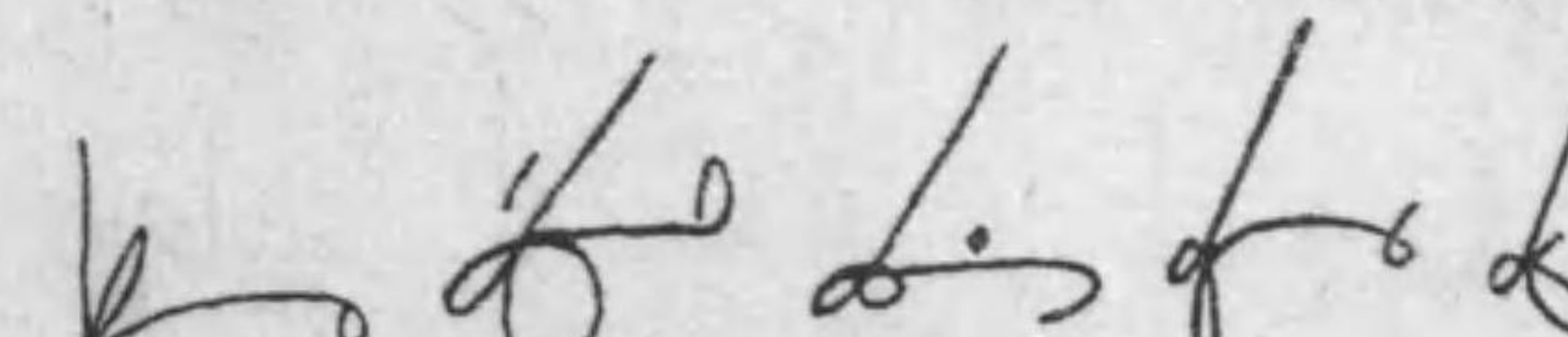
チタ政府 父君 秩序 地點



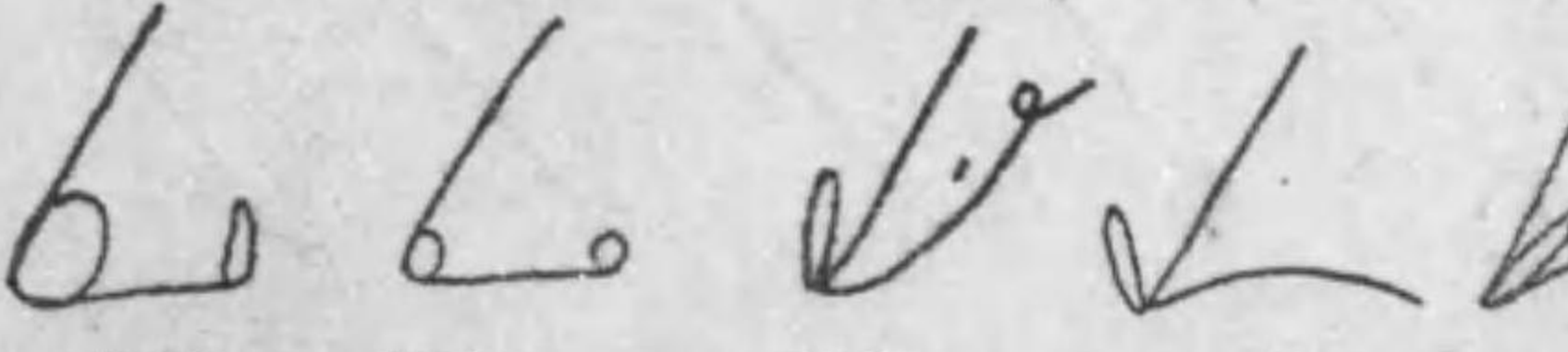
千歳 葛子 土屋 綴り



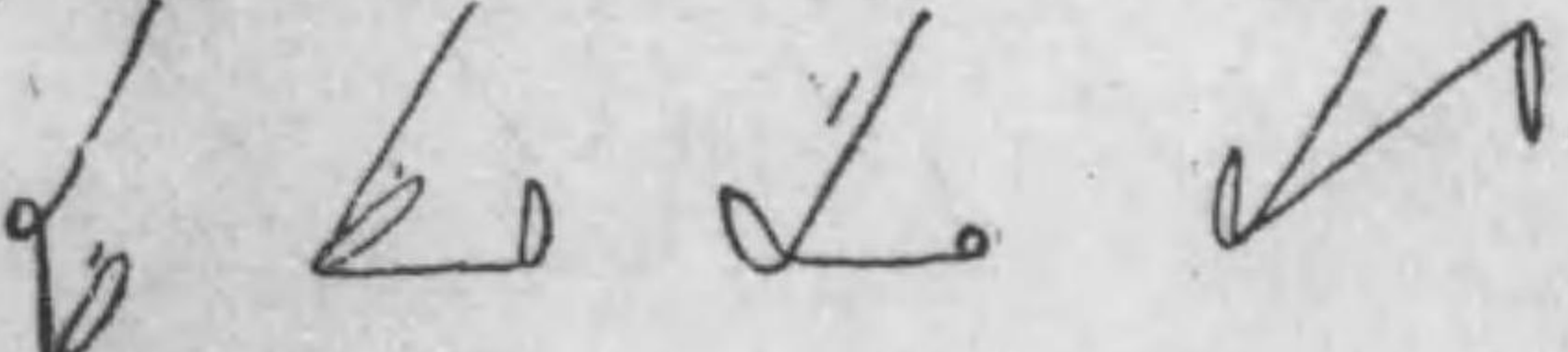
勤め 邸宅 手違ひ 鐵面 停頓



東拓 朽木 突然 とても 止む



鐵道 道德 投擲 咄々



ハ 行 縮 字

一段	二段	三段	四段	五段
○	◦	⊂	◌	◌
ハハ	ハヒ	ハフ	ハヘ	ハホ
ヒハ	ヒヒ	ヒフ	ヒヘ	ヒホ
フハ	フヒ	フフ	フヘ	フホ
ヘハ	ヘヒ	ヘフ	ヘヘ	ヘホ
ホハ	ホヒ	ホフ	ホヘ	ホホ

ナ 行 縮 字 應 用 例

何か	何者	名乗り	
擔ひ	瓊々杵	擔ふ	寝ない
布切り	根に持つ	野中	
年々	云ふのに	野々山	
罵しる	野に咲く	斜子	

マ行縮字

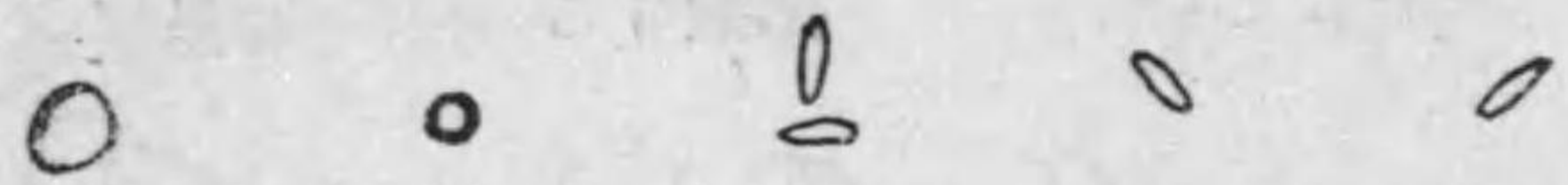
一段	二段	三段	四段	五段
〇	○	⊖	◌	◌
ママ	マミ	マム	マメ	マモ
ミマ	ミミ	ミム	ミメ	ミモ
ムマ	ムミ	ムム	ムメ	ムモ
メマ	メミ	メム	メメ	メモ
モマ	モミ	モム	モメ	モモ

ハ行縮字應用例

母君	破風症	破片	批判
響く	火吹竹	疲弊	被服
非法行爲	非凡	浮薄	不品行
風物	不平家	不法者	弊風
幣帛	兵變	兵法家	包被
茫漠	報復	防波堤	歩兵科

ヤ行縮字

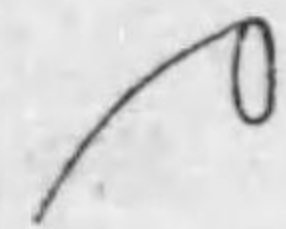
一段 二段 三段 四段 五段



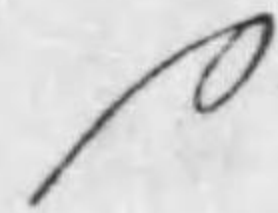
ヤヤ



ヤユ



ヤヨ



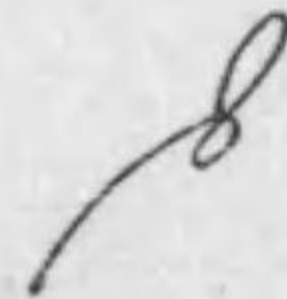
ユヤ



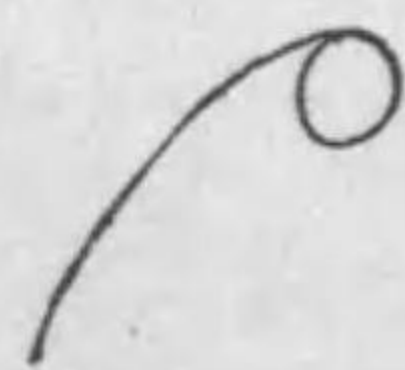
ユユ



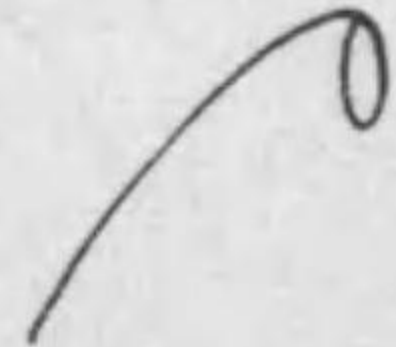
ユヨ



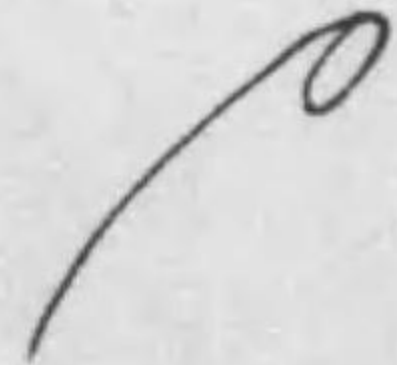
ヨヤ



ヨユ

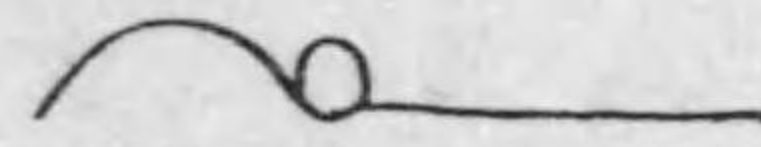


ヨヨ



マ行縮字應用例

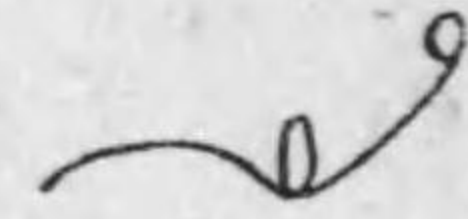
繼子



見みへ



蝮



豆粕



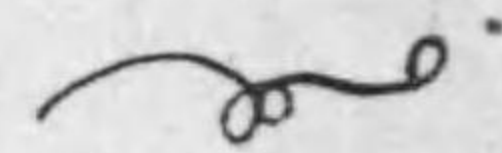
守り



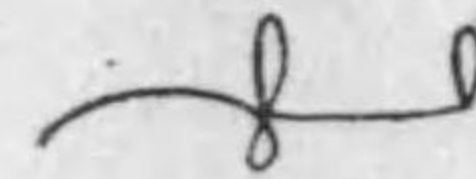
見舞



耳に



見向く



未明に



身許



無二



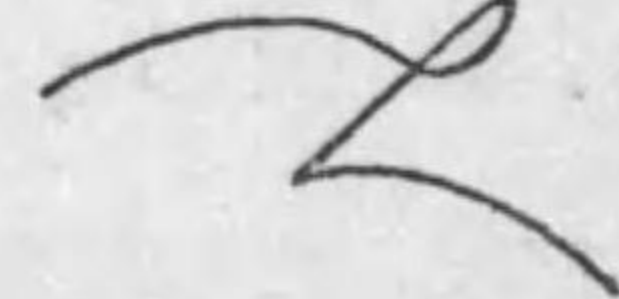
めまひ



股引



桃太郎



揉む



揉み様



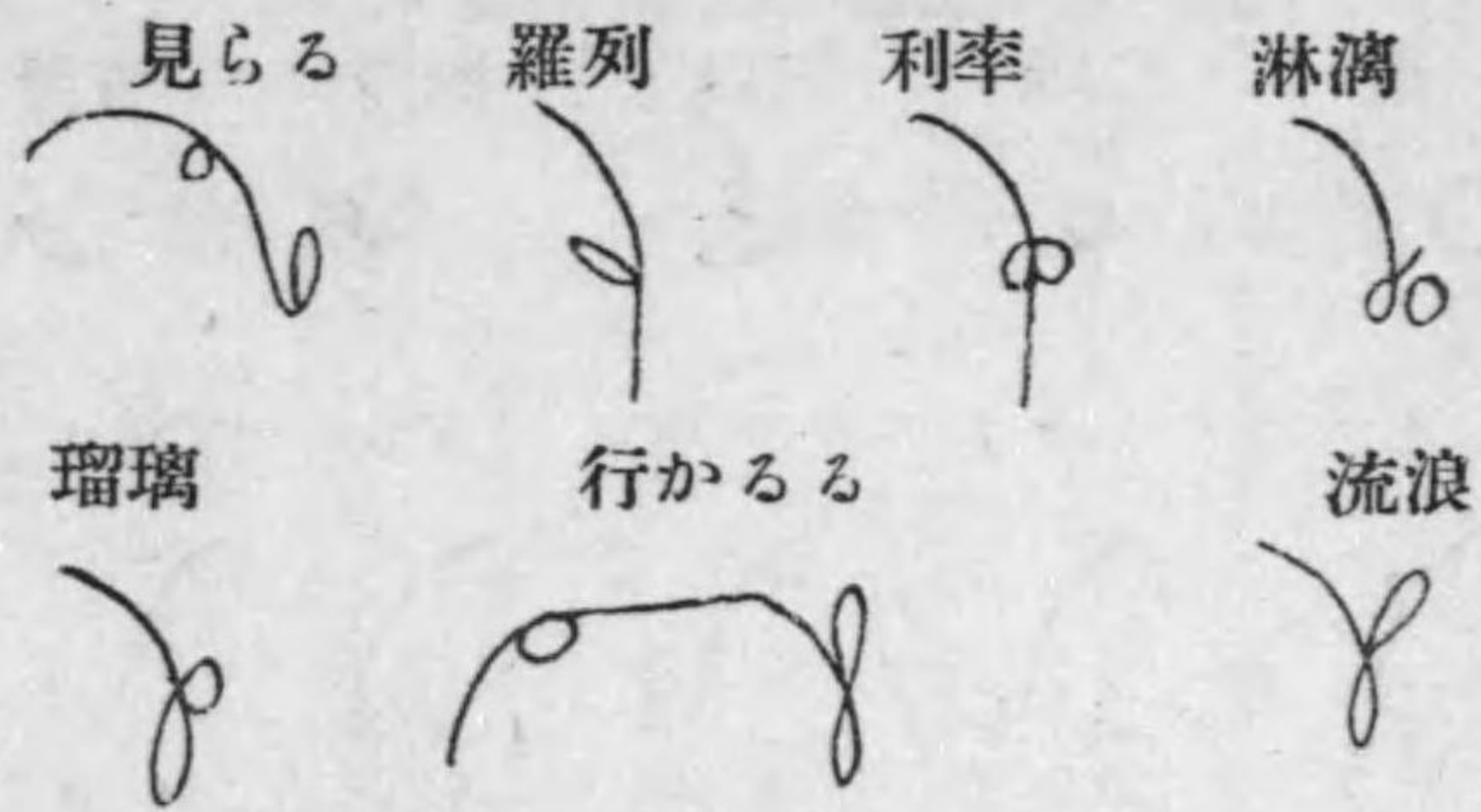
ラ 行 縮 字

一段	二段	三段	四段	五段
○	◦	⊙	◌	◌
ララ	ラリ	ラル	ラレ	ラロ
リラ	リリ	リル	リレ	リロ
ルラ	ルリ	ルル	ルレ	ルロ
レラ	レリ	レル	レレ	レロ
ロラ	ロリ	ロル	ロレ	ロロ

ヤ 行 縮 字 應 用 例

ややこしい	擲揄する	お湯屋
游戈	悠々然	豫約
餘裕	代々木	

ラ行縮字應用例



右の如く縮字はカ行なれば「カキクケコ」の文字中其何れが先に出ても之れに續くべき文字が同行の文字である限り一、二、三、四、五、段の縮字符號の順序に依て直ちにこれを應用するのであるが例へば「掲げ」と云ふ語句を綴らんとするにはまづ基礎文字の「カ」を記し次の「カ」は同行の第一段文字であるから一段縮字符號の「〇」を之れに連綴し次の「ゲ」も同行の第五段文字であるから五段縮字符號を之れに連綴すべきであるが斯く一個の文字に對し二個以上の縮字符號を連綴するは却て文字を複雑ならしめ運

縮字法

筆の速力を阻害するの虞れがあるから此種の場合には最後の「ゲ」は普通基礎文字の「ゲ」を用ふるのである、「直ちに」の場合も同様「タタ」と縮字し「ち」は基礎文字の「チ」を使用するのである故に「斯く斯く」の如く同行文字が四個も連續する時はまづ最初の「カク」を縮字し次の「カ」は普通基礎文字を連綴しこれに「ク」を縮字するのであつて、四個以上幾つか接續する時もこの要領に従て行くのである、なほ縮字法を使つて却つて運筆を滯滞せしめる文字もあるから其場合は必ずしも縮字しなくともよいのである而して「アイウエオ」の行即ち母音には使はぬ方がよい、従て縮字はカ行以下ラ行までに使用するものと記憶すればよいのである、又特に間接縮字として左の場合に限り應用する事が出来る。

- 一、鼻音を隔て、連綴する場合
- 二、拗音の内「キヤ、キユ、キヨ」「チャ、チュ、チヨ」、「シヤ、シユ

鼻 音 の 縮 字 例

勸告	管轄	緊禪	今月
散策	親切	新式	迅速
團體	天幕	耽溺	轉轍器
喃喃	年々	何年	繁忙
頻々	粉々	邊鄙	滿目
密綿	滿蒙	凜冽	連類

55-11-25

三、促音の場合

「シヨ」の場合（拗音は全部に應用し得るも他は餘り必要を認めぬから以上に止めたり然し使用すると否とは各人の自由である）

第一の鼻音即ち語尾を撥ねる言語文字に對しては鼻音の書き現し方に從て一旦筆を撥ねて而して後に其鼻音の含まつて居る文字がカ行の中の何れかであるなればカ行に對する縮字法により又『散策』と云ふ時には「サン」で一旦筆を切りそして次の「サ」を縮字しこれに「ク」の文字を接續するのである應用例に就きて見らるべし、なほ縮字符合も濁音の場合は其縮字符號に加點し鼻音となる時は末端を撥ねて現し促音長音等基礎文字其他の變化と同様に活用されるのである。

第二の拗音に對しては左の如く「キャ」行にはカ行縮字を「チャ」行にはタ行縮字を「シャ」行にはサ行縮字を應用するのである即ち

拗音縮字例

客室	料合	謝す	趣旨	賞讃
茶代	中等學校	調停	提灯	昇進

の如きものであるが其内キャ行とシャ行は縮字を使つて却て運筆を阻害する事もあるから使つてもよし使はぬでも差支へはない、寧ろ使はぬ方が運筆を圓滑にする場合も多いのである、然しチャ行のみは縮字を使用すれば非

常に便利である。

第三の促音の場合に於ける縮字であるが先づ應用例を示して見よう。

促音縮字例

學校	擊劍	國家	國庫	滑稽
小學校長	國庫金	失策	實際	叱責
卒先	脱退	撤退	貴とぶ	發奮

縮字法

これも一方法としては記憶して置かなくつてはならぬのであるが大抵の場

複語疊字符號

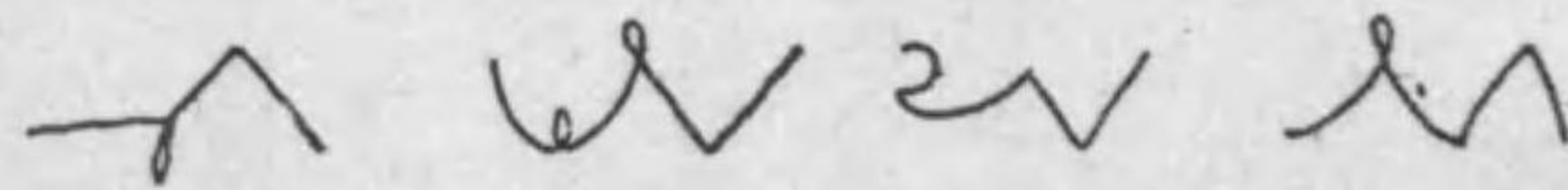


疊字符號應用例

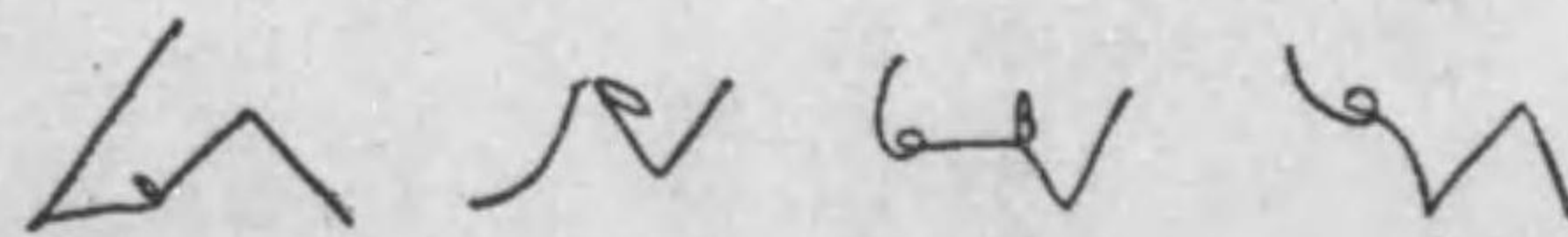
開會 返へす返へすも 代る代る わいわい



斯く斯く 轟々 否々 屢々



時々 賛成々々 福々 ヒラヒラ



第十 複語の書方

合普通の促音の書き現し方即ち基礎文字の交叉による方が簡單であるから
 實際に當つて適宜に取捨すればよい、今一つ間接縮字として母音即ち「ア
 イウエオ」の各文字が挟まる場合にも其文字を挟めた儘で縮字を應用する
 事も出来るのであるがこれも實際上餘りに便利ではないから詳しい説明は
 省略する事にする。

複語とは同じ言葉が重複して發せられるのを云ふのであつて例へて云へば
 『各々』とか『代る代る』とか云た様な語句であるが、この場合には鍵型にな
 った甲乙二種の符號を接続して同じ文字を繰返して書き現す手數と煩雜と
 を防ぐのである、而して甲と乙とは運筆の都合よき方を何れを使用するも
 隨意である。

一寸竝で云て置くが右の應用例中に「返す返す」と云ふのがある然るに速記文字に依て嚴密に照し合せると「カイク〜」となつて居て「エ」と「イ」が混同して居るがこれは實驗上地名人名の如き固有名調のものには絶対に不可であるけれども普通の言語文章に於ては「イ」と「エ」を混同して記すも何等差支はない、否寧ろ運筆上便利の場合が多いのである。

以上本記術の最も難關であり最も肝要なる縮字法の講述により一般の原則は説明し盡したるにより愈々進んで本速記術獨特の諸種の省略法並に自分の實際的經驗に依り考案したる諸種の便法につき講議を進める事にする。

言論の神聖は速記術によつて保たる

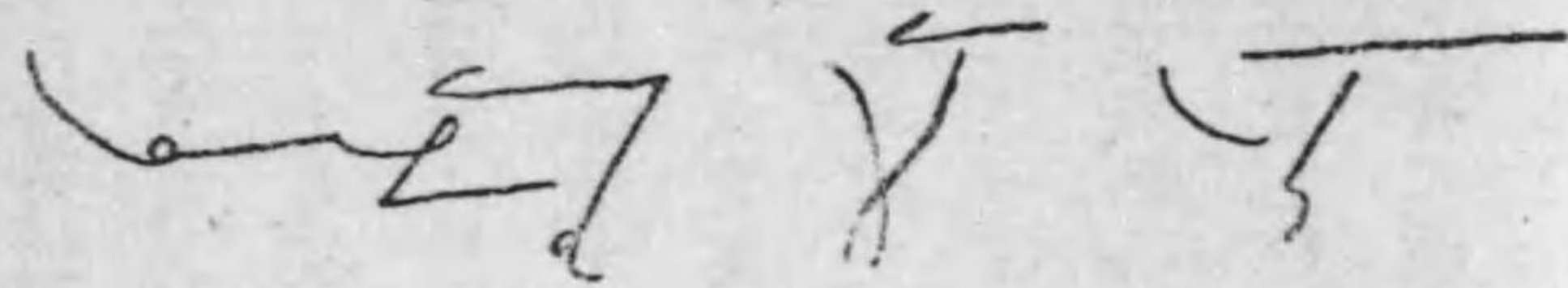
第十一 肯定否定法

肯定否定法と云ふのは或動作に對してこれを是認する事即「何々する」と断定するのが肯定であつて、反對に「何々せず」と云ふのが否定である、故に肯定と否定とは全然相反する性質のものであるから本速記術に於ては此意味に於て其肯定若くは否定すべき語句の上下に一線を加へ一目瞭然明確に區別し得る特殊の方法と符號とが設けられてある、然しこの方法も會得して仕舞へば至て簡單なものであるが説明するにも一寸複雑であるから左の應用例に就いてよく研究して貰ひたい即ち肯定の場合には其言葉の上部に一線を加へ否定の場合は其正反對の下部に一線を引くのが原則となつて居るのである。

法定否定肯

陛下に於か
せられては

賞讃せらる 反対すれば



大詔煥發
せられん

行幸あらせ
らるれば

成功せんと
欲すれば



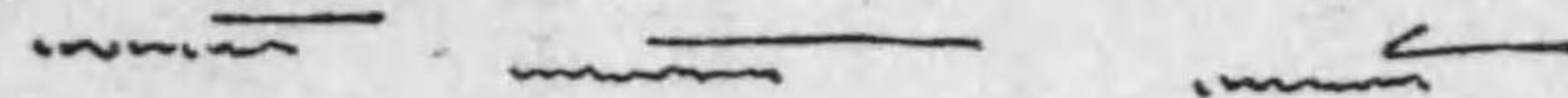
肯定法の法則は右の通りであつて唯『何々する』と云ふ單なる肯定のみでなく『すれば』『せられ』の如き何れも上部に同じく一線を引くのであるが『すれば』は『する』よりも二倍の長さになつて居り『せられ』は線の頭部が小さき鍵型になつて居る、然しこれは別に深い意味はないので唯『する』と云ふ肯定の原則に依り上部に引いた一線が變化したものと見ればよいのである、而して肯定否定とも線の頭部に鍵型を附すれば敬語即ち『何

肯定線

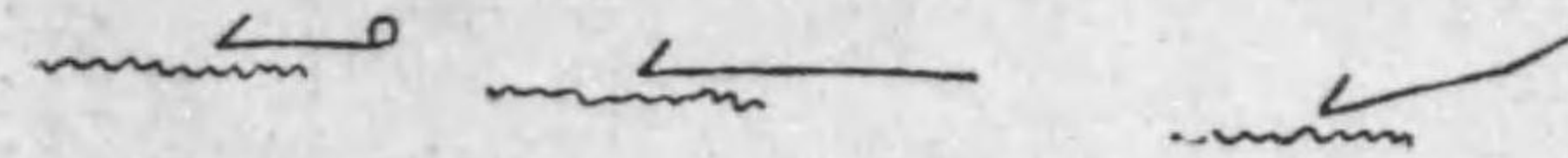
スル

スレバ

セラレ・セラル
セラレル・アラセラレ
アラセラル・アラセラレル



セラルル セラルレバ セラレン
アラセラルル アラセラルレバ アラセラレン

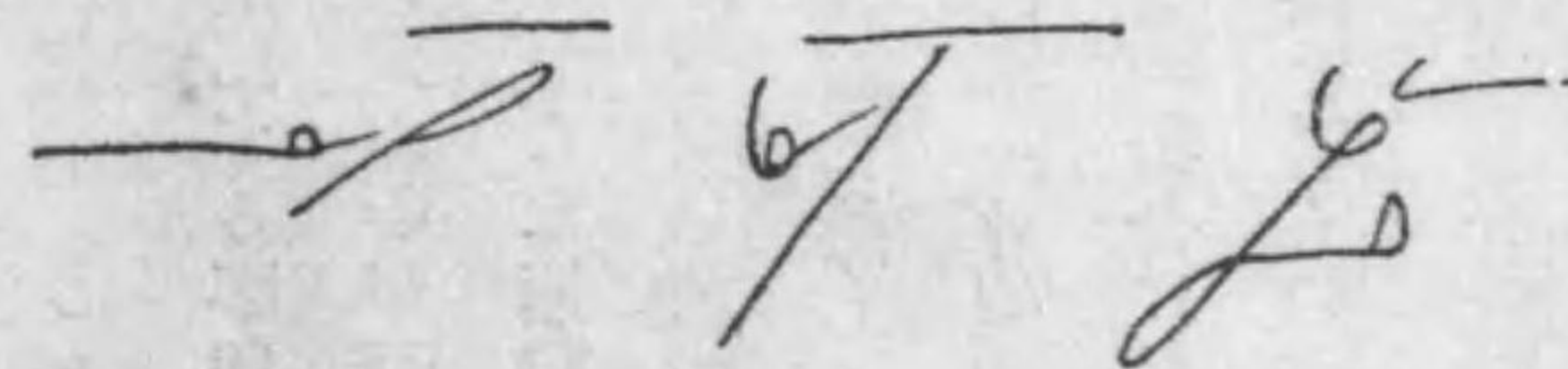


肯定線の應用例

研究する

奮闘すれば

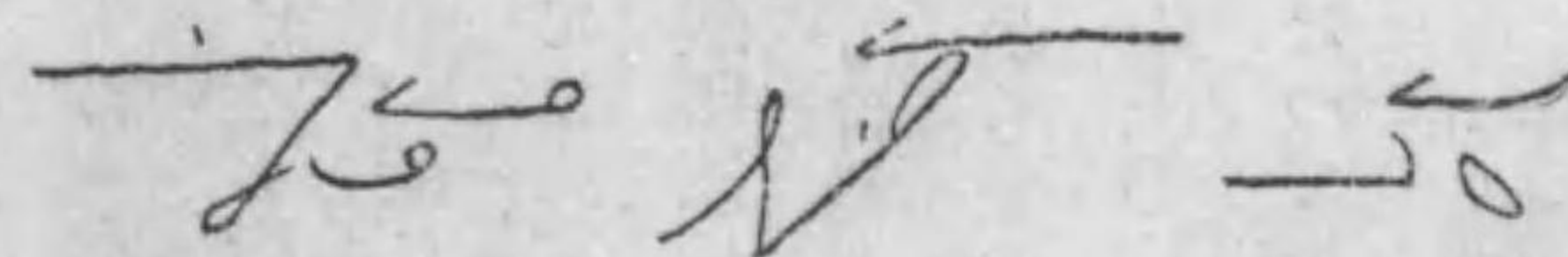
侮辱せられ



御殿にあ
らせらるる

出御あらせ
らるれば

還啓あらせ
られん



法定否定肯

ザリシ	セラレ ザリキ	セラレ ザリシ	ザルガ
ザルヲ 得ズ	ザルヲ 得ン	セラレザ ルヲ得ズ	

否定線應用例(一)

論議せず	隙さず	さに あらず	立たず	罪に ならず
還啓あ せられず	教育せ られず	臨御あ せられず	注意せざ れば	
憂悞せら れざれば	立たずんば	改善せら れずんば	努力せずん ばあらず	

々せられ』又は『あらせられ』と丁寧な言葉に變化するのである又『する』の線を二倍大に長く引けば『すれば』と變ずるのであるがこれは肯定否定とも同様であるばかりでなく總て『れば』の付く時は何れも其文字を二倍大に記して變化せしむる場合が多いから特に注意して置かなければならぬ。

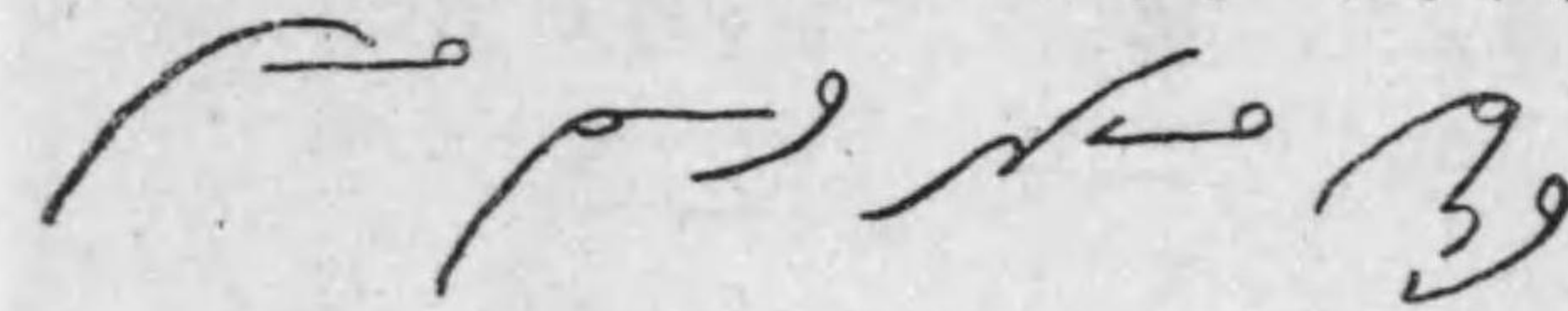
否定線

<small>ズ・セズ・サズ・ザラ・ザル セザル・カラズ・アラズ ナラズ・タラズ・アラザル ナラザル・タラザル</small>	セラレズ	アラセラレズ	セザレバ
セラレザレバ	スンバ	セズンバ	セラレズンバ
ズンバアラズ	セラレズン	バアラズ	ザリキ

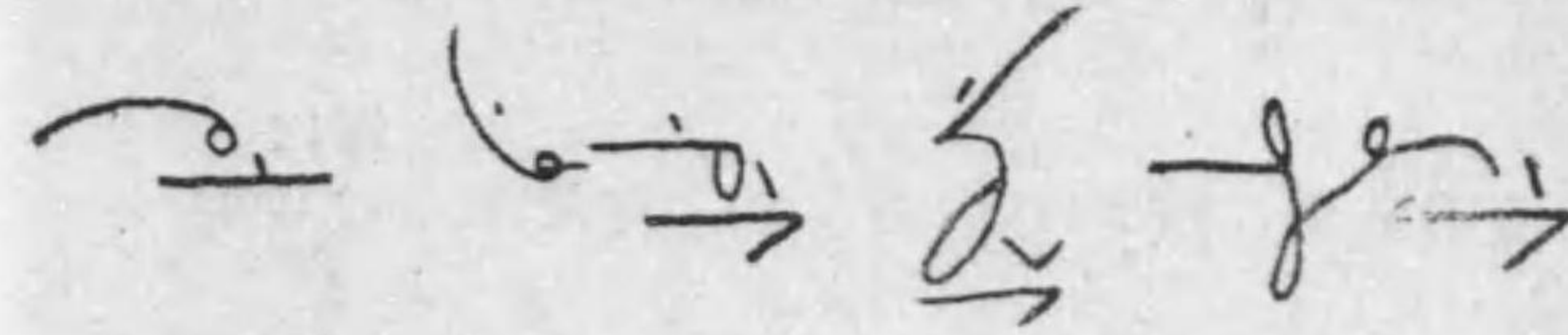
否定線の法則應用は肯定線のそれよりもなほ一層複雑であるが原則は『せず』と云ふ或動作なり言葉を否定し打消すにあるのだから其根本の精神さへ會得すれば譯はないのである、特に『ざりし』『ざりき』の如きは否定線の箇所に各其當該文字を置いただけで即ち『き』で打消すから『ざりき』となり『し』で打消せば『ざりし』となるのであるから實に重寶至便の方法であり『ざるを得ず』に至つては『ざるを』で打消し『得ず』と記して又打消すのが本則であるがこれを『ざるを』と打消したる其上部に直ちに『エ』の一字を置きて『ざるを得ず』と變せしめ二個の打消を一個に省略したもので實に神妙なる方法であるからよくよく注意して有ゆる場合に應用すべく心懸けなければならぬ、なほ『あらず』『ならず』『たらず』と云ふが如き各異りたる意味を含む語句を單に『せず』の否定線で現したるは餘りに簡畧に過ぎ翻譯の際過誤を來たす虞れもあるがこれは言語文章の構成上前後の意味により容易

否定線應用例(二)

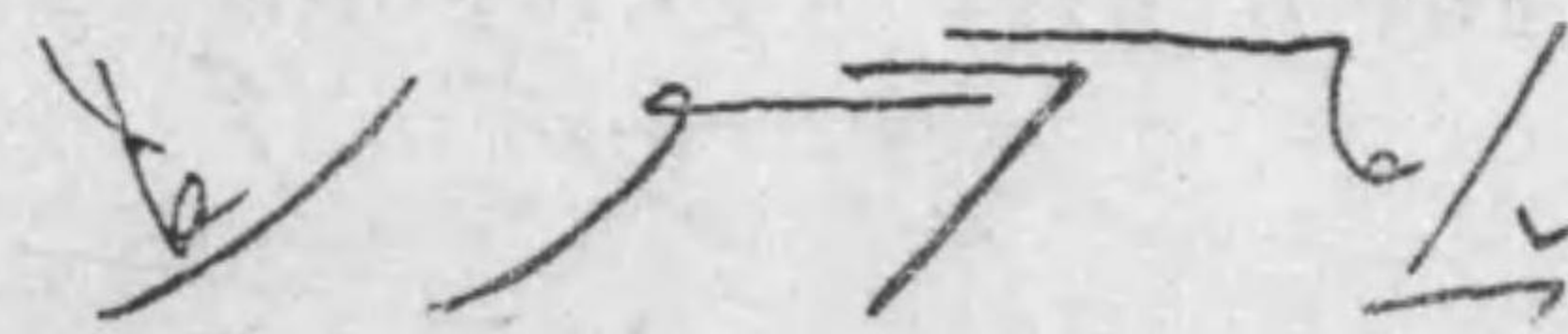
止まざりき 行かざりし 採用せられざりき 優待せられざりし



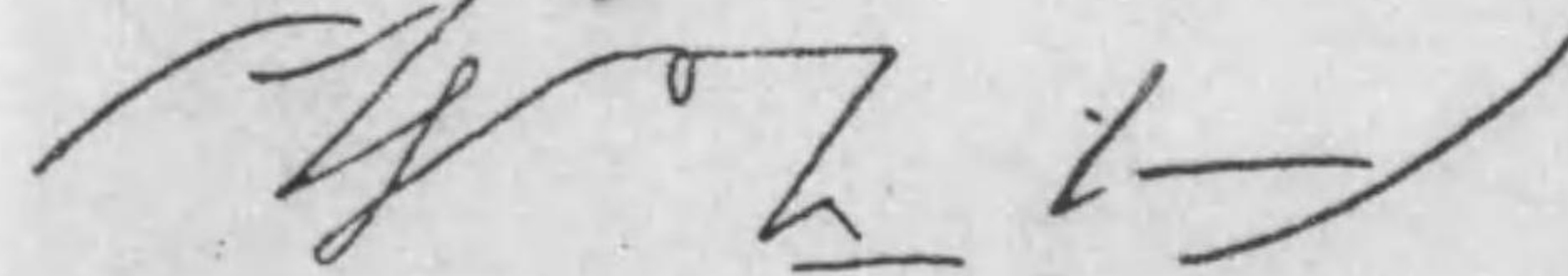
見ざるが 勉學せざるを得ず 同情せざるを得ん 苦しませられざるを得ず



發奮せずんばあらず 成功するとすれば奮闘せざるを得ん



止まざらんとして止む事を得ず 斷行せずんばあらず



語尾接續詞畧符(一)

ワ	テ・デ	デス	ノデ	ノデス
一	し	も	じ	じ
ニテハ	ニテモ	シテ	マデ・モノ	シタ
ハ	ハ	レ	の	ノ
デシタ	ツツ	シタイ	サレ	サレル
ヤ	ヨ	ト	ノ	ノ
サルル	ラレ	ラレル	ラル	ラルル
トモ	テハ	テモ	シツ	シキ
ドモ	デハ	デモ	ジツ	シク
レ	ハ	ト	ノ	ノ
シイ	ラシ	ラシキ	ラシイ	トカ
レ	ハ	ト	ノ	ノ
アイ・アツ				
一				

に推察し得るのである。

第十二 語尾接續詞の略字

語尾接續詞とは文法に於ける『テニヲハ』の如きもので本速記術に於てはこの範圍を擴張し所謂『テニヲハ』は素より吾々の日常發して居る言語の終り又は接續に多く使用する語句並に文章に於て多く使用する所の句末文字をひつ括めて言ふのであるがこれは其數が多いから一々説明する事を省略して直ちに茲に其全部を示す事にする、これも文字に大小長短の別があるからよく注意し夫と同時に語尾接續文字はなるべく或語句を現した文字に直ちに連続しなければならぬ。

成功せんと欲せば大膽ならざるべからず
又謹慎たらざるべからず

(ナホレオン)

語尾接續詞略符(三)

ナラ ナイ(無)	ナシ	ナキ ナク	ナラカン	
ナカリシ	ナケレバ	ナカラウ		
及ヒ・及ア	及ビシ	及ベバ	及バン	
及パウ	及ンテ			
ベシ	ベキ・ベク	ベカリシ	ベケレバ	
ベケン	ベカラズ	ベカラザレバ		
爲シ・爲ス	爲セシ	爲サウ	爲サン	爲セバ

語尾接續詞略符(二)

ナリ	アリ	タリ・シタリ
ナル	アル	タル・シタル
ナリシ	アリシ	タリシ
ナレバ	アレバ	タレバ
ナラバ	アラバ	タラバ
ナラウ	アラウ	タラウ
ナラン ナラヌ	アラン アラヌ	タラン タラヌ

其四の應用例

茲にあります

茲にありますれば

茲にありまする 茲にありました 茲にありましたる

茲にありましたれば 天氣になりまして 行きます

其所にありませう 茲にありません 其所にありませんでせう

何所にもあり
ませんでした 行ません 行ませんでして

語尾接續詞略符(四)

マス
アリマス
ナリマス

マスル
アリマスル
ナリマスル

マシタ
アリマシタ
ナリマシタ

マシタル
アリマシタル
ナリマシタル

マスレバ
アリマスレバ
ナリマスレバ

マシタレバ
アリマシタレバ
ナリマシタレバ

マシテ
アリマシテ
ナリマシテ

マセウ
アリマセウ
ナリマセウ

マセン
アリマセン
ナリマセン

マセンデシテ
アリマセンデシテ
ナリマセンデシテ

マセンデシタ
アリマセンデシタ
ナリマセンデシタ

マセンデセウ
アリマセンデセウ
ナリマセンデセウ

セウ

語尾接續詞畧符 (六)

ゴザル ゴザラン ゴザラウ ゴザリマス

Handwritten shorthand symbols for ゴザル, ゴザラン, ゴザラウ, and ゴザリマス.

ゴザリマシタ ゴザレバ ゴザイ ゴザリマスル

Handwritten shorthand symbols for ゴザリマシタ, ゴザレバ, ゴザイ, and ゴザリマスル.

ゴザリマシテ ゴザリマセウ ゴザリマセン ゴザリマセンデシテ ゴザリマセンデシタ ゴザリマセンデセウ

Handwritten shorthand symbols for ゴザリマシテ, ゴザリマセウ, ゴザリマセン, ゴザリマセンデシテ, ゴザリマセンデシタ, and ゴザリマセンデセウ.

語尾接續詞畧符 (七)

ツタ・ナツタ ツテ・ナツテ ナカッタ ナカツテ

Handwritten shorthand symbols for ツタ・ナツタ, ツテ・ナツテ, ナカッタ, and ナカツテ.

参りませんでして そんなになりませんでせう そうでせう

Handwritten shorthand symbols for 参りませんでして, そんなになりませんでせう, and そうでせう.

語尾接續詞畧符 (五)

ゴザイマス ゴザイマスル ゴザイマシタ

Handwritten shorthand symbols for ゴザイマス, ゴザイマスル, and ゴザイマシタ.

ゴザイマシタル ゴザイマシテ ゴザイマセウ

Handwritten shorthand symbols for ゴザイマシタル, ゴザイマシテ, and ゴザイマセウ.

ゴザイマセン ゴザイマセンデシテ ゴザイマセンデシタ

Handwritten shorthand symbols for ゴザイマセン, ゴザイマセンデシテ, and ゴザイマセンデシタ.

ゴザイマセンデセウ ゴザイマスレバ ゴザイマシタレバ

Handwritten shorthand symbols for ゴザイマセンデセウ, ゴザイマスレバ, and ゴザイマシタレバ.

其八の應用例

者がある　　そうである　　誰であらう　　茲に居つた

~~~~~

そばに居つて　　行くのである　　見るのであつた　　云ふのであつて

~~~~~

僕のであるが　　君のであらう　　至つたのであるが　　其所であつては

~~~~~

どこであつても　　高いのであつては　　どんなのであつても　　便利であらう

~~~~~

其七の應用例

買つた　　買って　　行かなかつたか

~~~~~

立つた　　立つて　　見無かつた　　見無つて

~~~~~

語尾接續詞畧符 (八)

アル　　デアアル　　デアアラウ　　デアツタ　　デアツテ

~~~~~

デアツテハ　　デアツテモ　　ノデアアル　　ノデアツタ　　ノデアツテ

~~~~~

ノデアツテハ　　ノデアツテモ　　ノデアアルガ　　ノデアアラウ

~~~~~



### 第十三 數字の速記法

數字の速記と云ても別に數字其物には變りはないのであるが唯速記文字の綴り方は歐文と同様横に書くのであるから勢ひ數字も羅馬數字を用ひるのが便利である、然し例へば「一億五十一圓」と云ふ如く位取の懸隔ある數を突嗟の間に記す場合に羅馬數字の正式な配列方ではとても迅速に書取る事は不可能である、何となれば「一億五十一圓」と書くには普通なれば「100,000,051」と書かなくてはならぬから其位取にさへも面喰ふ計りでなく斯の如き數字が數多連續して發せられる時はとても煩雜に堪へずして遂に筆を擲たなければならぬ様な不結果に終るのである、故に本速記術に於ては如何に複雑な又如何に位取の困難な數と雖も頗る簡單に記し得る一定の法則と符號が設けられてるのである、この數字の速記法は獨り速記術に於

て便利であるのみでなく一般日常の商取引若くは隨時隨所に開かるる各種の講演等に現れた數字を備忘的に書取る際に利用すれば至極重寶な方法であつて時間の經濟を計り敏活なる商取引と爲さんとする方面の人士は速記術そのものに關係はなくとも單にこの數字速記法を會得したのみでも其裨益する所は實に甚大なものがあるのである

己れに賢れる者と共に處れば

則ち自ら以て足らずと爲し

己れに如かざる者と共に處れば

則ち自ら以て餘りありと爲す

(范祖禹)

### 數字速記符號 (二)

十萬 二十萬 三十萬 四十萬 五十萬 六十萬 七十萬 八十萬 九十萬

ㄥ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

一百萬 二百萬 三百萬 四百萬 五百萬 六百萬 七百萬 八百萬 九百萬

ㄥ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

一千萬 二千萬 三千萬 四千萬 五千萬 六千萬 七千萬 八千萬 九千萬

ㄩ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

一億 二億 三億 四億 五億 六億 七億 八億 九億

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9

右の如く各數字の末尾に各異りたる一線を接続して其單位を示すものであつて即ち十位の符號の末尾を結べば十萬位となり百位の末尾を結べば百萬位千位も同様にして千萬位となるのである而して其數字が金高であれば右の符號を應用した數

### 數字速記符號 (一)

十位 百位 千位 萬位 十萬位 百萬位 千萬位 億位

／ 一 ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

一 二 三 四 五 六 七 八 九

1 2 3 4 5 6 7 8 9

十 二十 三十 四十 五十 六十 七十 八十 九十

ㄥ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

百 二百 三百 四百 五百 六百 七百 八百 九百

ㄥ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

一千 二千 三千 四千 五千 六千 七千 八千 九千

ㄩ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

一萬 二萬 三萬 四萬 五萬 六萬 七萬 八萬 九萬

ㄥ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ ㄨ ㄣ ㄤ

法記速の字數

數字の速法數は大體右の如く  
 であるが組織的數字でなく一  
 二とか四・五圓とか五・六  
 十人とか云ふ如き不規則な數  
 に對して羅馬數字を横に 123  
 又は 45圓 と書き 560人と記  
 すに於ては百二十三や四十四  
 五圓やら判斷に苦しむ結果を  
 生ずる虞れがあるのでこれ等  
 の不便を補ふためにも亦一種  
 の方法が設けられてある下の  
 例に就て研究されたい。

數字速記應用例 (二)

|        |        |           |            |
|--------|--------|-----------|------------|
| 一二三    | 二三四圓   | 四五百萬      | 二三人        |
| !      | 2      | 4         | 2          |
| 四五十四   | 四五百人   | 五六千人      | 一二三四五六七八九十 |
| 4      | 4      | 5         | 1          |
| 一二五六七圓 | 三四七八九圓 | 會衆四五千まぜらる |            |
| 1      | 3      | 34        |            |

字の中間に圓錢厘  
 の速記文字を適當  
 に挿入し石數なれ  
 ば石斗升合と同じ  
 く速記文字を挿入  
 し里程なれば里町  
 間、反別なら町反  
 畝歩と夫々適當の  
 文字を挿入すれば  
 よいのである應用  
 例に就いてよく見  
 るべし。

數字速記符號應用例 (一)

百二十三萬四千五百六十七圓八十九錢一厘 五百四圓五十二錢

123 4 5 6 7 8 9 10 11 12

一億五百六十七圓五厘 三十五萬六千二百六十八石三斗五升

1 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

五千六百萬二千二百六十三石 一萬三千六百尺

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

九百六十八里二十三町五十間

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

右の應用例に就き説明すれば一二三と云ふ場合には先づ羅馬數字で1と書き直ちに其下に二、三と數字を記す代りに二つの點を順次下に重ねて打つのである又二、三四圓と云ふ時は同じく羅馬數字で2と記し其下に三、四と順次二ツの點を打つのは前同様であるが圓と云ふ言葉が付いて居るから其時は其四と打つた點を直ちに速記文字の圓にするさすれば四となる可き位置にある點が圓であるから順を追ふて算へると二、三、四圓である事が直ちに判明するのである二、三人の場合も同様であつて先づ羅馬數字の2を記し其下に三を現すべく打つた點を直ちに速記文字で人とすればこれ亦明かに二三人である事を書現し得るのである故に四五十圓でも四五百人でも五六千人でも右の方法に従つて數字速記法の符號を適宜に應用すればよいのである而して一二三四五六七八九十と云ふ様に順を追ふて發音される時にはまづ第一に羅馬數字で1と書き二、三、四と順次加點して行つて十と云た

所で前の數字速記法の十位の符號を記すのであるがこの場合は一から十まで一々加點して行つては面倒であるからよい加減に筆を迂らして於て十と言た時にびんと撥ねて十位の速記符號を現せば其筆のつた箇所から二から九までの數字が含まれて居る事を現し得るのである又右の應用例中の一二五六七圓と云ふが如く數字が斷續的に出て來る場合にはまづ最初の一を羅馬數字の1にて記し次は二であるから直ちに其下部に加點するこれで、一、二迄は出來たが今度は次の數の三が無くて五と飛んで居るから三と順を追ふて點を打つ事は出來ぬ故に改めて數字の5を記し六、七圓と前に述べた法則に従つて行けば完全にこれを書き現し得るのである。

今一ツ數字の部類に屬するものではないが數字の含まれたる語句にして日常最も多く使用されて居るものがあるそれは日時分秒と何割何分と分數とであるがこの場合に於ける省略法は左の通りである。

これも至極簡單なものであつて一割と云ふ時は數字の1を横に引く一線で中央より割れば即ち一割である二割なれば2の中央部を横線で割る又單に三分と云ふ時には何割と割るべき數字が無いから唯一線を引いて其下に3と書けばよい厘の場合は一線を引き其線の右横に並べて數字を記すのである故に一割三分四厘五毛と云ふ時には1を横線で割り其線の下に2と書き同一の線の横に4と5とを記せば其數字の位置と線の構成に依つて直ちに明瞭に書き現し得て然かも些の過誤を生せぬのである分數は數學に於ける法則と同様であるが唯中央に引く横線を省畧したのみである十位以上は其數字に速記法符號を應用すればよいのである日時分も應用例を見れば直ちに判るが十二日午前三時四十五分と云ふ時にはまづ12と數字で記し其の數字の筆を止めず直ちに横に一線を引き其線の上に3を乗せ線の横に45と記せばよい午後の場合は線の下に時間を現す數字を書く要するに線の上

數字速記應用例 (三)

|                               |                 |                    |        |
|-------------------------------|-----------------|--------------------|--------|
| 一割                            | 二割              | 三分                 | 四厘五毛   |
| +                             | 2               | 3                  | -45    |
| 一割三分四厘五毛 十二割五分三厘 二百六十五割七分五厘六毛 |                 |                    |        |
| <del>+</del> 345              | 1253            | <del>265</del> 756 |        |
| 二分の一 五分の四 十分の六 百分の二十五 一千分の二十  |                 |                    |        |
| 1/2                           | 4/5             | 6/10               | 25/100 |
| 五百萬分の三 二百五十分の十 千分の二           |                 |                    |        |
| 3/5000000                     | 25/100000       | 2/1000             |        |
| 十二日午前<br>三時四十五分               | 二十八日午前<br>六時三十分 | 三日午前八時四分           |        |
| 12345                         | 2863            | 324                |        |
| 十五日午後二時<br>三十分十五秒             | 三十一日午後九時五十分四十五秒 |                    |        |
| 152315                        | 319545          |                    |        |

午前で下が午後横が分秒である唯分と秒の數字の間には少さい點を一ツ置かなければ區別が出来ないのである又二時とか三時とか云ふ如く單獨に時間のみを記す時は二なり三なりの數字に速記文字の『ジ』を連続するのである。(應用例中二十八日以下線が日を現す數字と分離して居るがこれは故らに切り離す必要はないのである)

#### 第十四 片假名早書法

片假名早書法と云ふのは日本文字の片假名に對して速記術の方則を應用したものであつてこれは如何なる場合に必要であるかといふに由來速記術の基礎文字なるものは其角度傾斜並に長短を定められた方則通りに極く正確に記せば如何なる言語をも何等の間違なく速記し又翻譯し得るけれども實際に應用する場合に於ては、角度傾斜は素より長短を正確に現す事は至難

である従つて地名人名殊に外國の地人名等の如き固有名詞に至つては速記文字のみにてはこれを正確に速記し翻譯し得る事は難中の難事である茲に於て何等かの方法を以てこれを補はなければならぬ事になるのであるがこれに就ては先輩諸君の言に徴しても又自分の經驗に見ても片假名を以て其都度書き現して行くのが最も適當である然し對手が非常な速力を以て發音する場合にこれを一々片假名で書き取ると云ふ事は實際に於て完全に出來得るものではない、これは自分も非常に苦心をしたが其結果この片假名早書法なるものを發見し得たのである一見した所では却て複雑の様であるが其根本に於て速記術の方則を應用してあるのであるから短時間の練習によつて完全に圓滑に應用し得て而も文字を非常に省畧し得る便法である、則ち鼻音は文字の末端を撥ね促音は文字を交叉し長音は文字を二倍大に記し濁音は一個の加點により現はすのである。左の如し。

片假名早書符號 (二)

|    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| ヘー | トー | チー | リー | ヌー |
| ヘ  | ト  | チ  | リ  | ヌ  |
| ガ  | ギ  | グ  | ゲ  | ゴ  |
| カ  | キ  | ク  | ケ  | コ  |
| ザ  | ジ  | ズ  | ゼ  | ゾ  |
| サ  | シ  | ス  | セ  | ソ  |
| ダ  | ヂ  | ヅ  | デ  | ド  |
| タ  | タ  | ツ  | テ  | ト  |

この片假名  
早書法の書  
方も矢張り  
速記文字同  
様横に速記  
の原文と並  
行して書か  
なければな  
らぬ應用例  
は左の通り  
である。

片假名早書符號 (一)

|     |     |      |     |     |
|-----|-----|------|-----|-----|
| イン  | ロン  | ハン   | ニン  | ホン  |
| ル   | ロ   | ハ    | ニ   | ホ   |
| ヘン  | トン  | チン   | リン  | ヌン  |
| ヘ   | ト   | チ    | リ   | ヌ   |
| ルン  | ラン  | ワン   | カン  | ヨン  |
| ル   | ラ   | ワ    | カ   | ヨ   |
| コツキ | ザツシ | ホツタン | タツキ | ソツキ |
| コ   | ザ   | ホ    | タ   | ソ   |
| イー  | ロー  | ハー   | ニー  | ホー  |
| イ   | ロ   | ハ    | ニ   | ホ   |

片假名早書法應用例

レーニン トロツキー ロツキー山 ロツテルダム

レニ ン トロツキ ー山 ロツテ ルダム

コンスタンチノーブル ロンドン ホーランド

コ ス タ ン チ ノーブル ロン ド ホーランド

フィンランド バツキンガム テツキ ケンブリツチ

フィンランド バツキ ンガム テツキ ケンブリツチ

第十五 加點省略法

加點の省略法と云ふのは或一定の場所に小點を打つて幾つかの速記文字を省畧する方法であるまづ實例を示して然る後ち説明する事にする。

加點省畧法の實例

法略省點加

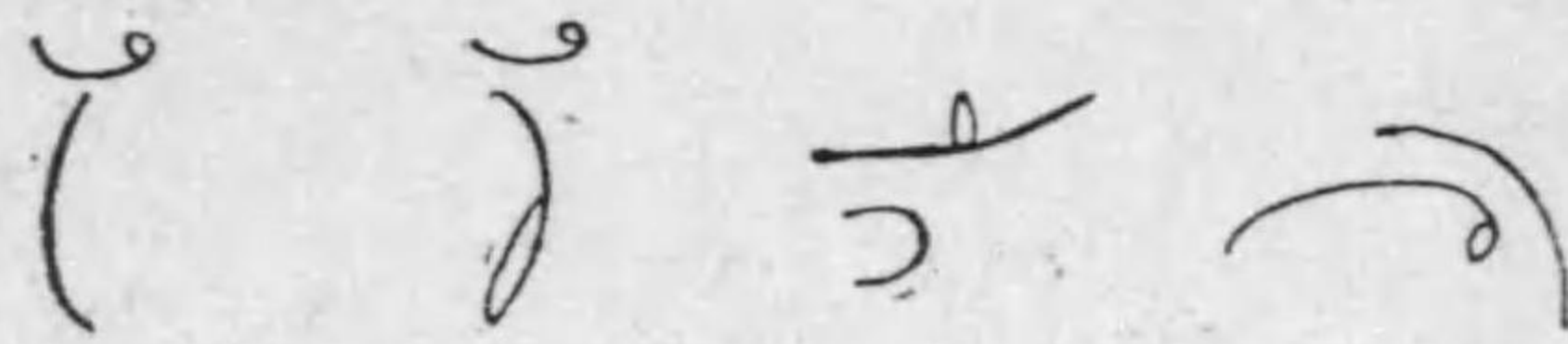
|   |   |    |    |    |      |
|---|---|----|----|----|------|
| 上 | 下 | 此上 | 其上 | 目上 | 木の目上 |
| 下 | 上 | 此下 | 其下 | 目下 | 木の目下 |



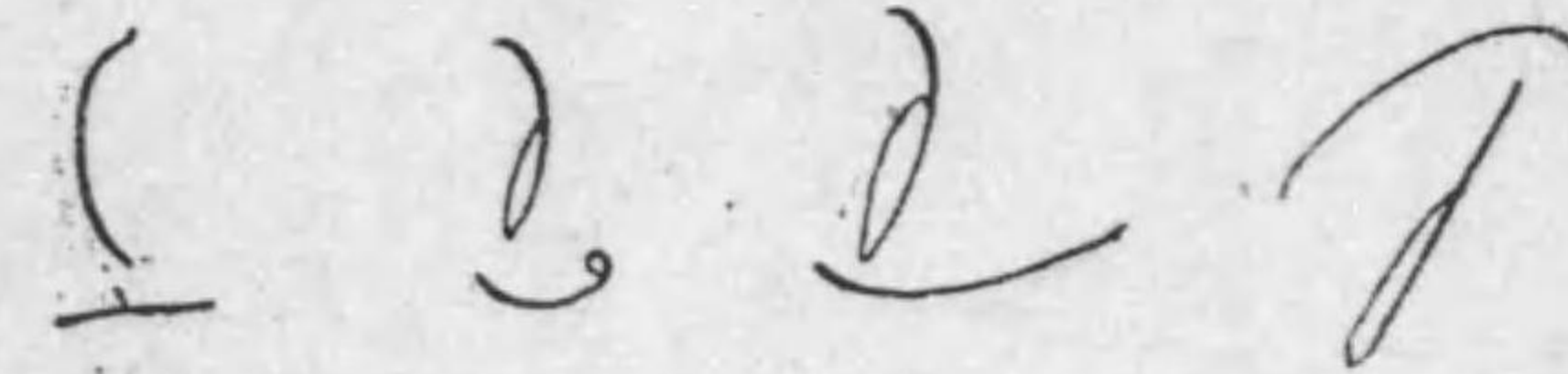
右の通り上と云ふ時は如何なる場合に於ても其書き來つた速記文字の上に  
 加點すれば容易に其意味を現し得るのである又下と云ふ時には文字の下部  
 に加點すればよいのであつてこの方法は幾つかの速記文字を省略し得る便  
 利があるのみでなく一見して上又は下である事が判るから翻譯の際に非常  
 に樂であるなほ右の中『此』と『其』との符號が妙な形になつて居るがこれは  
 加點省略法のために特に斯の如く記すものではなくて速記術で言ふ所謂略  
 字である（略字は後に全部纏めて載録してあるからそれに就いて研究され  
 たい）而してこの加點省略法も唯上下うへしたといふ簡単な言語を現はし得るのみ  
 でなくこの原則に従て種々の應用が出来るのである、即ち右の應用例にも  
 ある通り『此上に』と云ふ時は『此』と云ふ符號の上に速記文字で『に』の文字  
 があるから『此上に』となり『此』の下に『が』を記せば『此下が』となるのであ  
 るつまり加點を省畧して直ちに其場所に『に』なり『が』なり『の』なり其語句

### 上下加點の應用例

此上に 其上に 井上君 目上から



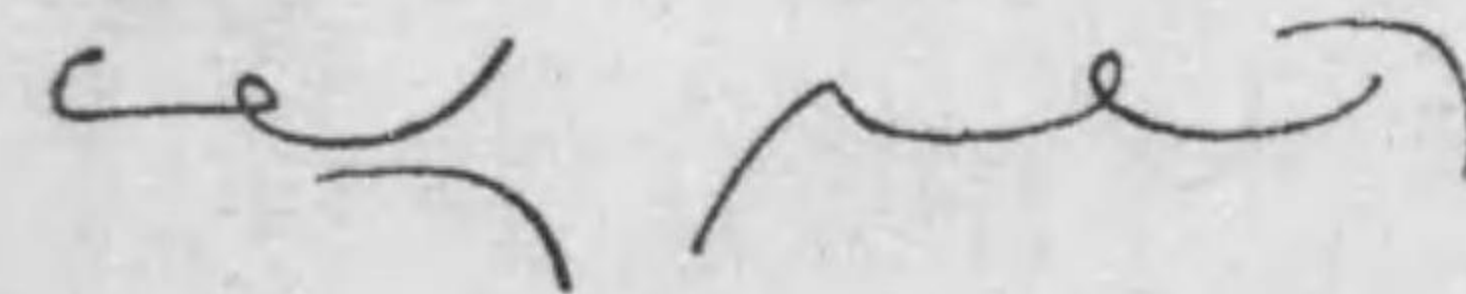
此下が 此下に 其下の 山下町



木の下君 阪下町 机の上に



脇の下から 屋根の上から



### 法 略 省 點 加

ネバ

~~~~~

行かねば	見ねば	来らねば	やらねば	去らねば
行かねば ならん	見ねば ならん	来らねば ならん	やらねば ならん	
去らねば なるまい	やらねば なるまい	書かねば なるまい	出さねば ならん	

即ち『行かねば』と
か『見ねば』と云ふ
様に『ねば』の附く
場合には其語句の
下部に加點して省
略し得るのであつ
て『行かねばなら
ん』といふ如く『ね
ば』のあとになほ
或文字の接続され
る場合は『ねば』と
加點すべき其位置

の下に續くべき文字を適當に應用すれば其位置に依つて上なり下なりの語
が含まれて居る事を現し得るのである。
又この加點省略法は右の如く唯上下の二種類に限らず内外、出入等にも應
用が出来るのである例へば輸出又は歳出と云ふ時は速記文字の『ユ』又は
「サイ」の外側に加點し輸入又は歳入は内側に加點するとよいのであつて頗
る便利な方法である。
なほ加點省略法には今一つ上下、出入の如き相對的のものでなく他に獨立
した一つの方法があるそれは『行かねば』とか『見ねば』とかと云ふ語句に對
し其『ねば』を加點に依つて省略する方法なのであつて左の應用例に就いて
見られたい。

大海も一滴の水より成り

千里の道も一步より始まる

から直ちにあとに接続すべき文字を記して『ねば』を全然省略して仕舞ふのである。

第十六 一般的略字と使用法

略字と云ふのは普通日本文字に於ける漢字の如きものであつて其働きも亦同様であるが唯其組立に於て多少趣を異にして居るのである漢字は其多くが形象文字即ち或物なり精神なりを對照として組成されて居るに對し略字に於ては多くは或一語句を綴るべき幾つかの速記文字の中の主要なる文字のみを採つて其語句を現すべき特殊の符號として制定したものであつてこれに依て其語句を構成する幾つかの速記文字の全部を羅列する手数を省き併せて運筆を快速圓滑にし速記の能率を高めんとする手段に外ならないのであるが中には例外として漢字の如く或物體を對照としたもの即ち形象略

字もないではない略字が速記の能率を高むる一手段である以上其基礎文字が複雑であれば勢ひ略字の數も多く制定する必要があるのは勿論の事である然し本速記術に於ては既に基礎文字に於て簡略であるのみでなく縮字法の如き便法が設けられてあつて餘りに多くの略字を制定する必要を認めないのである、又略字は速記の速度能率を増進せしむる上に於て缺くべからざるものではあるがこれも程度の問題で速記の能率を單に略字に依てのみ高めんとするに於ては大なる誤謬に陥るのである、なせなれば人の言語は多岐多様であつてこれを一語句とし類別するに於ては殆ど幾千幾萬を算するもなほ及ばざるの感がある故にこれに對し一々略字を制定せんとするは到底爲し能はざる所であるのみでなく假令制定し得たりとするも果してこれを悉く記憶し突嗟の間に應用し得るや否や疑問である否絶対に不可能なる事であると信ずる略字は其性質上或る限定されたる一語句を現す符號に

過ぎぬものであるから假令有ゆる語句に對し一々之を制定したりとするも略字のみを以てしては到底有ゆる言語文章を完全に書き現す事は不可能であるから勢ひ普通速記文字を以て語尾送り假名等の變化に應じなければならぬのであるが無制限に制定したる幾百幾千の略字を普通速記文字と連続する時はこゝに多大の不條理を生じ速記中精神の統一を紊し従つて畧字の數が多ければ多い程運筆の圓滑を缺き譯文の際に過誤を來す事が多いと云ふ結果に逢着するのである以上の理由に依り略字を多く制定し使用する事に依つて決して速記の速度を増し能率を高め得るものではなく寧ろこれと全然相反する結果を生ずる事は實驗上動かす事の出来ない眞理とされて居るのであるから特に一言して動もすれば略字萬能の謬想に捉はれんとする初學者諸君に警告して置く要するにこれは程度の問題であつて適當に應用すれば其効果も亦偉大なるものがあるが決して或程度を越してはならぬ故

に略字の多寡によつて其速記術の完不完を表示するものと云ても敢て過言ではないとされて居る此意味に於て自分は略字を徒らに多く使用する事を排して速記文字其ものゝ連続方と語尾接續詞の略記方に意を用ひなほ進んでは變則縮字(附録に於て説明)の便法をも案出し運筆の輕快と圓滑とを圖り以て高速度の發音を容易に速記し得る事に努力し成功したのであるからよく此趣旨を理解して決して略字萬能の謬想に捉はれ悔を後日に貽すの愚に陥らない様になければならぬ本速記術に於て使用すべき略字は以上の趣旨に依り最も肝要なりと認めたる語句に對し左の通り定めただのであるから符號の大小長短を鑑別し又細心の注意を以て記憶し應用し譯文の際誤らぬ様にしなければならぬ又略字は其性質上なるべく普通文字とは切り離して記すべきである而して左の略字符號の上部に各異りたる語句の配列されたるものは其一個の略符を以てそれ等各語句に通用せしむるものである。

一般畧字符號(二)

徹頭徹尾	まころ	なるべく 成程	余る,り	願ひ,ふ
希くば	庶幾ふ	最も	私	吾筆
諸君	有様・喜び,ぶ 有難い,たう	著るし	著しく しき	
著るしい	望み,む 初め・甚だ	甚だしき しく	甚だしい	
苟も・愈々	未だ	所謂	動もすれば	

一般畧字符號(一)

拘らず・共に 思ふ・否や	或は	而して	而も	と雖も
然り・然る	然れども	然りと雖も	併しながら	而已ならず
相變らず	ながら 間	現れ,る・改め,む 豫じめ	關係	抑も 昨日
一昨日	然らば 須らく	奉り,る 仕へ,へる	誠に	手讀

一般畧字符號(四)

況んや	従つて	曰く	企て、つ
頻りに	徒らに	將に	益々・明日
明後日	必ず	必ずしも	就中
免れ	より・よる	よれば	それ・夫れ
其	これ・之れ	此	聞く所によれば

一般略字符號(三)

已を得ず	已む事を得ず	自ら	同じ、じく、じき
並に	凡そ	總て	悉く
直ちに	忽ち	既に	以て
まい あるまい	結局	因みに 致し、す	即ち 頗る
速かに	事・せしめ・せしむ	せしむれば	漸く

獎 推

簡便にして多量の意義を含蓄し而して最も習得を容易ならしむる文字ありせば文化の利器之に過ぐるなかるべし、櫻井郷三君は方今速記界の曉楚なり、斯術に造詣深く、鍛練久しく、此に獨創の見を立て新に速記應用の文字を作れり、其の簡捷利便にして、意義の含蓄大なる、一畫にして數語を包羅し、眞に文字の理想を得たり、若し之を學校に應用し、家庭に應用し、社會に普及するに至らば、恐らく文字の革命を來たし、文化を推進すること、猶ほ電信電話の如くならん、昔倉頡字を作りて天粟を雨らし鬼夜哭すといふ櫻井君の速記字或は庶幾きか、吾人喜んで之を大方に推奨するに躊躇せざる所以なり。

字 田 滄 溟

以上の講述により本速記術の文字方則は全部説明し盡したのであつてこれにより如何なる言語文章と雖も完全に速記し得るのであるから反覆熟讀し微に入り細を鑿ち充分に會得し常に練習を怠らず各其欲する所に向つて利用しなければならぬ

一般畧字符號(五)

語る所によれば 是由之觀 就き 就きては

就て 就ては 於て 於ける・行ひ、ふ

如し か如し の如し 如き

如く 斯の如き・如く 斯の如きは 斯如くで

斯の如くんば 顧みる 顧みれば 敢て・演説

と云ふ と云へば と云はば 的 主義

例綴連字文記速

のであるけれども 何所に 臣民の 中心

力があるか それを 見定める事が 時代と共に

變遷する 政治の 要諦でなければならぬ 諸國の

憲法の 變遷沿革を云ふものは 要するに

如何にして 國家の 中心力を 捉へるかを云ふ

一點に 歸するので 我國史を 回顧するに

速記文字連綴の實例

(其 一)

如何なる 國家 如何なる 時代に於ても 其國家

其時代の 中心 勢力が 政治の 局に

當らなければならぬを云ふ事は今更云ふまでもない事である

我國に於ては 終始 一貫 天皇が 統治權を

總攬せられ 國民一致して 之を 翼賛し奉る

例綴連字文記述

世襲の 氏族を以てしては 國民の 中心

力な 代表 せしむる事が 出来ない様になり

大化の 改新 によりて 官吏 として

全國より 人材を 取りて 任命する事になつて居る

其後 農業 開け 勢力が

地方に 移るに至つて 政權 武門に

國始 神武天皇が 中國を 平定して 都を

大和に 定められたる 時に 當りては

天皇に 隨身したる 文武の 官僚が

世襲して 政治の 局に當つた 事は よく 其

當時に於ける 國民の 實力の

中心を 捉へ得たものである 併しながら 時勢の變遷に應じて

速記文字連続の實例

(其 二)

真心の 力を 強よめるには

心を すなほにしなければいけない

偉大なる 真心を 持つ 人によつて 時々

自己の 心を 研く 必要がある

耶穌の 言行に 接つせよ 釋迦の 教に

歸したのも 當然である 今日に於て 政黨が

國民の 中心力を 代表し 政治の

局に當つて 臣民の 間を 疏通し 國家の

重きに任する 資格能力

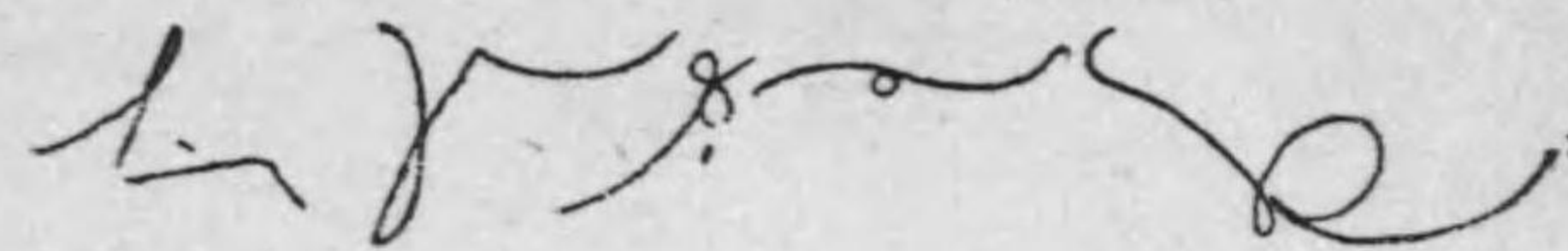
ありや否やが 我國 政治の 當面の

問題であらうと思ふ

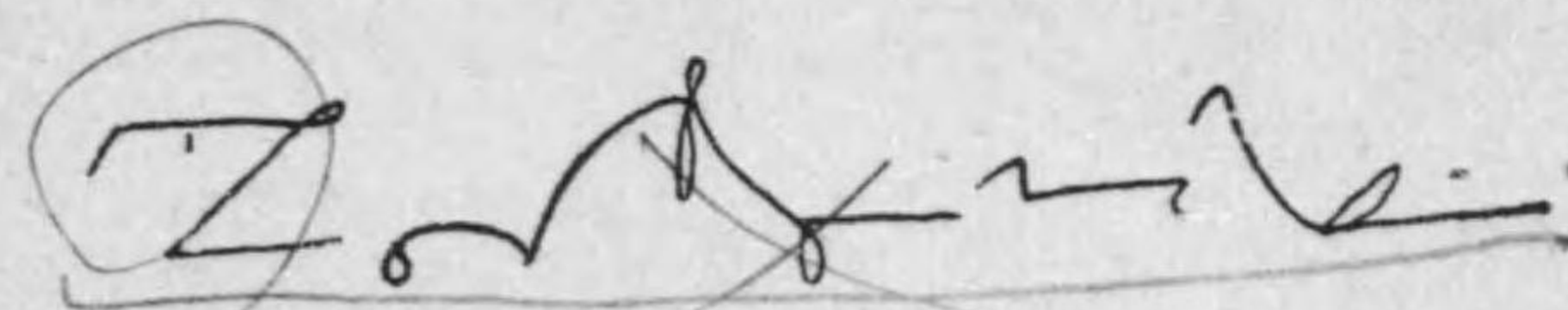
附

録

從へ 其他の 聖人皆な 我等の

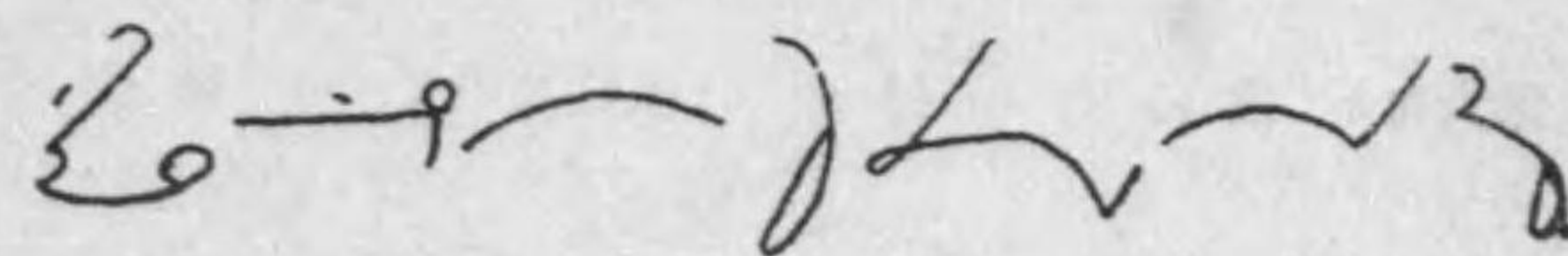


心を 生かして 呉れる所に 價值がある



天地
壹小

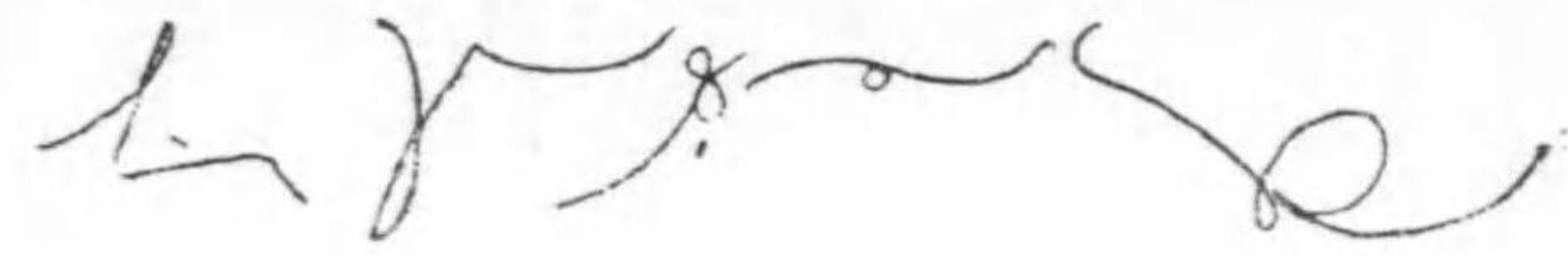
偉大なる 藝術も 其力を 持つてゐる。



附

録

從へ 其他の 聖人皆な 我等の



心を 生かして 呉れる所に 價值がある



偉大なる 藝術も 其力を 持つてゐる。



子
の
書
し

速記術の至利至便なる技術である事は多言を要せぬのであつて其應用範圍は時世の進歩と文化の發展に伴れ社會各方面に向つて益々擴大されつゝある事も一般に認められて居る所で斯術修得者の幸福は有形無形に絶大なものがあるのが特に速記を職業として世に立たんとする人士のため余は特に附録として左の便法を添附し速記の能率をして益々増進せしめん事を庶幾するものである


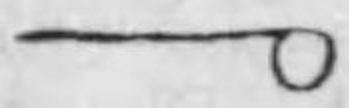
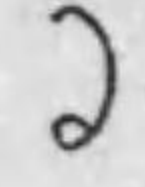

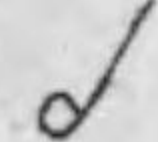
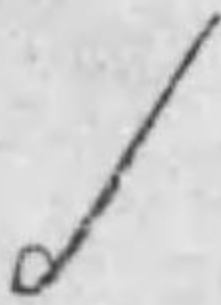


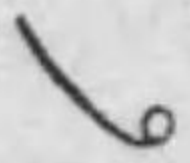



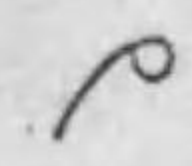
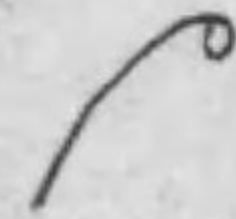


第十七 變則縮字

變則縮字とは前に述べた同行文字の縮字法即ち正則縮字法とは全然其性質を異にして居るものであつて従つて其應用も餘りに廣い範圍には亘つて居ないのであるけれどもこの方則を使用する事に依つて一層速記文字の連続を自由圓滑にし指頭の働を緩和し得て其速度を彌か上にも増進せしむる事

が出来るのである然しこの法則は或程度迄速記に熟達した後ち即ち基礎文字なり正則縮字法なり一般略字なりに精通し其文字と法則に充分習熟したる後でないといふ事を應用し却つて譯文の際に過誤を招く原因となるからこれは最後の最後に研究し應用せられたいのである第一は『イ』と『エ』の變則縮字であつて『カサタナハマヤラ』と『コソトノホモヨロ』の十六文字に限つて使用するのである元來速記文字中の母音即ち「アイウエオ」の各文字は其字體が最も小さいのでこれを單獨に記し又單に或文字に連綴するには左程書き難いとも感じないが更らに下に續く可き文字との綴り合せになると指頭の微細なる働を要するので高速度の速記殊に美文體の如き形容詞澤山の言語文章を速記する場合に餘程手先の器用な人でないと筆が亂れて完全に書き現す事が出来ないと言ふ憾がある故に母音中最も多く使用される『イ』と『エ』を採つて而も最も綴合に困難なる單線文字即ち末尾を結ばない以上

十六文字に變則縮字として應用する事としたのである右の中カとコの變則は別としサイ、ソイは基礎文字の『ス』と紛はしくタイよりライ迄とトイよりロイ迄は其形體が基礎文字の各行の二段目並に四段目の文字と全然同型であるから譯文の際過誤を來しはせぬかとの疑惑を懐く人もある又事實に於て其弊害は確かにあるかも知れない然しそれは其人の腦力の關係と速記術の熟不熟に依つて決せらる可き問題であつて『彼に妻子あり』を『彼にスシあり』と譯し『廢物利用』を『ヒ物利用』とし『來年度豫算』を『リ年度豫算』と譯したのでは意味が通せぬから少し常識的に判斷すればそれは妻子廢物來年度であるといふ事は直ちに推讀し得られるのである故に此變則縮字は未だ常識的に頭腦の發達して居ない年少者速記術に未だ熟達しない初學者は應用しない方が過がないのであるこれに反し常識の發達し斯術圓熟の域に達したる人にしてこの方法を利用するに於ては運筆を滑かにし文字の角

變則縮字の一

		イ,エ ○			
カイ カエ	コイ コエ	サイ サエ	ソイ ソエ	タイ タエ	
					
トイ トエ	ナイ ナエ	ノイ ノエ	ハイ ハエ	ホイ ホエ	
					
マイ マエ	モイ モエ	ヤイ ヤエ	ヨイ ヨエ	ライ ラエ	
					
ロイ ロエ					
					

度を減ずる特徴を有して居るから手先の働きに餘裕を生じ従つて如何に複雑なる言語文章に對しても常に悠々綽々たる態度を持って而も文字を正確に書き現し得るから譯文に際しても又非常なる好結果を得る事となるのである然し地名人名等の固有名詞に對してはなる可くこの變則は使用せぬ方がよいなほ右の表中「サイ」と「ソイ」は特に形が變つて居つて基礎文字の「ス」と同型になつて居るがこれは實驗上から割出して制定したものであるからこの通りに記さなくてはならぬ。

勝利を得る爲には、私共が要望するものに向つて突進しなくてはならぬ。益々突進しなくてはならぬ。常に突進しなくてはならぬ。(ダンソン)

第二は『ク』の變則縮字法であつてこれ又『カサタナハマヤラ』と『コソトノホモヨロ』の如き單線文字に應用するを原則としてあるが熟達するに従つて各文字に應用すれば至極便利であるとして『單線と複線の』の二種の符合のあるのは『策畧』とか『食道樂』とかの如く『ク』にて筆を止める語には『一』を用ひそれに向接続すべき文字のある時は『複線』を使つて筆を滑かに運ばしむるのである

二の字縮則變

ク ク
 | 0

應用例

卓絶 落第 特別 策略 博物


應用例

開始	妻子	對支對米	內務省
			
廢物	毎年	及ば	來年度
			
會議	盃洗	腦溢血	燃る
			
ロイテル	内閣	採用	廢棄
			

變則縮字の三

ナカ	ナキ	ナク	ナケ	ナコ
ノカ	ノキ	ノク	ノケ	ノコ
ヤカ	ヤキ	ヤク	ヤケ	ヤコ
ヨカ	ヨキ	ヨク	ヨケ	ヨコ

あつて他
は普通カ
行文字と
の接續が
餘り困難
でないか
らそれに
及ばぬの
である。

應用例

食道樂	落魄	北陸	目錄
獨力	即時	福島	櫻井君
拓殖局	宿泊	芍藥	沐浴

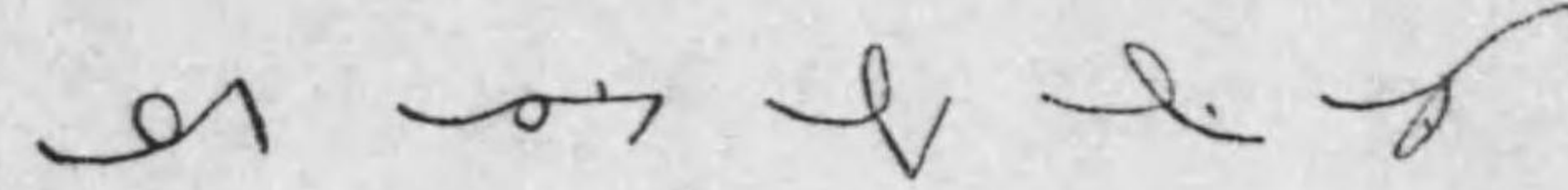
第三は「ナ」と「ノ」
「ヤ」と「ヨ」の四文
字に對してカ行縮
字を應用するので
あつてこれ又「サ
タナハマヤラ」ソ
トノホモヨロ」の
各單線文字に應用
し得るのであるが
實驗上「ナノヤヨ」
の四文字に使用す
るのが最も便利で

第四は正則縮字に於ては『キシチニヒミリ』を現す可き縮字符號は小なる『○』であるが變則に於ては之を單に『、』で現したのであつてこれは縮字を使用する可き文字が鼻音である場合に限られるのである例へば『歡喜』とか『暫時』とか云ふ時『カン』と鼻音の現し方に依つて筆を撥ねたる後ち正則縮字では『キ』と縮字するには小なる『○』を以てするのであるがそれには母音の接續よりも尙一層手先の微細なる働を要するので強て明確にこれを現さんとせば運筆を不自然にし溢滞せしむる嫌があるので特に『、』を以て『○』に代用する事としたのである而して其縮字した『、』になほ續く可き語句のある時は其點を心持ち強く打つて直ちにこれに接續して記すのである應用例に就てよく研究されたい。

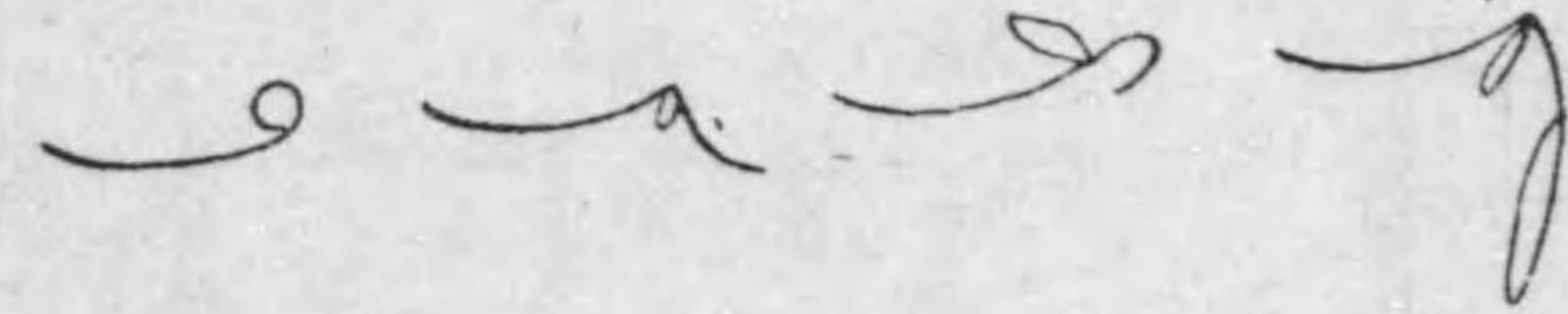
失敗も勇者にまつては成功に達する(石に過ぎない(ハリバートン))

應用例

なかなか 泣顔 泣く泣く 泣けば 名古屋



農家 軒端 のけ者 農工商



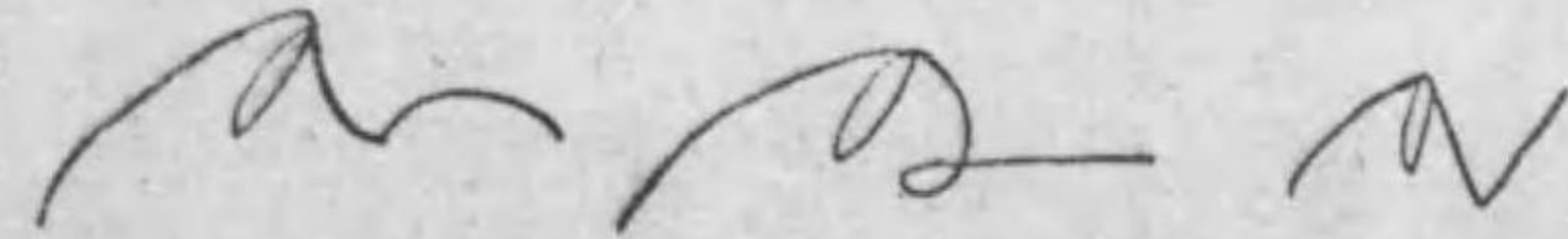
廳て 焼餅 役場 夜警番



よからう よき心 慾張り



横濱 横須賀 よくよく



四の字縮則變

キシチニヒミリ

欣喜 暫時 嶄新 欣喜

—、 ㄥ、 ㄥ、 ㄥ、

探知 嫌忌 論理 淋漓 天地

ㄥ、 —、 ㄥ、 ㄥ、 ㄥ、

歡喜せり 暫時休憩 論理上

—、 ㄥ、 ㄥ、 ㄥ、

第十八 角力記事の速記

新聞社の速記事務に従事するものは毎年春夏の二回國技館で催ふされる大角力の勝負並に手捌を電話で速記しなければならぬのであるが角力記事は一種特別の用語があつて素人には一寸判断に苦しむ様な場合も多く初めてこれにぶつつかつた人は大に面喰ふものであるが慣れて仕舞へばこれ位簡單なものはない従つてこれに對する省略速記法を設けたのであつて速記者として活動せんとする人のために參考までに述べて置く事にする、なほ近時運動熱が旺盛になつて來た結果として野球の如きも新聞速記者としては一通は通して居らなければならず又音樂の如きも有名な曲目位は知つて居ないと飛んだ失敗を招く事がある、序だから一言して置く。

これも矢張り新聞速記者の重要な任務の一であつて相場記事は今や全國各新聞とも最も重要視しつゝあつて而も其用語は角力記事以上に面倒なもので實に素人泣せの尤なるものであるがこれも慣れて仕舞へば其用語が殆ど型にはまつたものであるだけに至極雑作のないものである相場記事中最も多く使用せられる用語の省略法を示せば左の通りである

第十九 相場記事の速記

めに一線を加へるので上手投の場合は其斜線を文句の上部に下手投の場合は其下に書けば明瞭に書現す事が出来る、切りの場合は押切でも寄切でも其文句の真ん中を上から下に一本の短い線で切るのである、出しの場合は押出しても突出しても其文句の右上部に加點して現し、放しの場合は應用例にある通り横に撥ねたる一線を加へて示すのである

角力の略符

投げ、倒し	切り	出し	放し

應用例

上手投	下手投	突出し	突放し	
押倒し	より切り	押切り	より倒し	踏切り

右の如く四種の符號によつて大抵の勝負手は書現はせるものであつて其他櫓投げ持出しとかいろ／＼あるけれども以上の四種の符號を適宜に應用して書現す事が出来るのである即ち投げと倒しは其文句の上から右斜

相場略符

寄附 ドタ 丁度 打止め 引け

應用例

九十五錢と寄附 五十錢ドタ 三十錢ドタと打止め 五錢方上放れ寄附カ

七錢方下放れて寄附 十圓丁度と大引せり 高値引け

まづざつとこ
んなものであ
つてこの應用
法に就ては茲
に詳しい説明
は省略するが
一廻り速記が
上達し相場記
事に通達した
ら直ちに會得
されるのであ
る

第二十 初學者のために

速記術は繰返し述べた通り至極簡單なものであつて何人と雖も容易に修得し得るのであるがこれを實地に應用して遺憾なきに至るまでには相當の練習を積まなくてはならぬ凡そ物には順序があり所謂千里の道も一歩からで速記術も以上講述し來つた所を通讀したのみでは何等の役にも立たぬのであつて一通り文字なり方則を會得したならばこれが習練を積む事に努力しなければならぬ初學者に於ては速記は何でも速かに書くものと誤解し無暗と焦る氣味があるが決して焦つてはならぬ一言練習上の心得に就て參考までに述べて置く事にする

附 録

一、速記と用具

速記の用具としては鉛筆と日本紙とがあればよいのでこれも別に規則めい

て定めてある譯ではないが講演又は電話等の如く一瀉千里に書き取る場合には多少用具に注意しないと速記の能力を減殺する虞があるまづ鉛筆は固からず軟かゝらず三B乃至四B位の程度のもを最もよしとし用紙は西洋紙の如く紙質の粗雑で固いものはよくないから駿河半紙か改良半紙の如くなるべく紙質の柔がにして鞏強なものがよい尤もこれは充分に熟達してからの事であつて練習中には費用の関係もあるから別に鉛筆も紙も擇ぶ必要はないのである而して鉛筆は決して固く握りてはいけない極く軽く軟らかに殆ど指先で支へて居るに過ぎぬ位の氣持でこれを持ち紙の上に強く押し附けぬ様にすらくと之らして行く様にしなければ充分に早く書く事が出来ぬ様であるこれ等は極く些末の事であるが決して等閑に附してはならぬ。

一、練習の順序

まづ第一に基礎文字を記憶したならこれによつて極く簡単な語句即ち梅とか櫻とかの單語を書き綴つて見るのである然も速記文字は長短と傾斜角度とを少しく誤れば薩張り譯の判らぬものになるから始めからよく注意して丁寧にかきなければならぬそして單語がうまく綴れる様になつたら漸次綴字の數を増し五六語から七八語と習練を積み例へば俳句和歌の如きものに及びこれが完全に書ける様になれば今度は新聞なり雑誌なりに就て漸次短文から長文に及び練習するのであつて速記文字も普通文字と同じく句切々々を明かにして而もなるべく多數の文字を連綴するのであるが無暗と澤山の文字を連綴し様とするとそこに無理が生じて翻譯の際過誤を來す事となるから語句の切目を明かにして綴らねばならぬそして數字とか固有名詞等の場合はなるべく他の文字と接續連綴せぬ様に切離して書くのであるなほ速記は第一目的として多くの場合他人の發言を書取る者であるから練

習中も一通り文字の連続と方則とを會得したらなるべく新聞なり雑誌なりを人に読んで貰つてそれを書取る様にするがよい、この場合最も注意しなければならぬのは速度の緩急であつて初めから無暗と早く読み速く書かうとすると文字が亂れて仕舞つて従つて完全に翻譯が出来なくなるから決して自分の書き得て而も翻譯し得る程度を越してはならぬ最初は何人でも普通日本文字で書くよりも却て遅いものであつてそれがため中途に於て嫌氣ざし茲に折角の志望を放擲する様な場合も尠くないのであるが前にも述べ通り物には順序があるから如何なる人と雖も速記の練習に當つては決して最初から大を望んではならぬ常に不撓不屈の精神を以て所謂ねばり強く練習する事が必要である斯くして繰返し練習する間に不知不識上達するものであつて而も書取つたものは必ず翻譯即ち普通文字に書き改めるか又は目讀して原文と照合し間違のあつた場合は速記文字に無理があるか又

は書間違であつたかをよく／＼點檢し再び過誤を繰返さぬ様其時々細密に研究し置かなくてはならぬ、そして相當の速力で書き得る様になつたら對手の人即ち読んで貰ふ人のない時は盲書練習といつて新聞なり雑誌なりを前に展げて其文句のみを見て全く手許を見ずに書綴る練習をするのである此方法は手許を見ないのであるから初めの間は字體が崩れて無論書いたものゝ、翻譯等は出来ないが速記文字其ものを深く腦裏に彫み附け従つて速力を増す事に於て甚大な効果がある、この盲書練習に就てはいろ／＼議論もあるが熊崎先生もこれを是認し唱導して居られるし自分の經驗によつても又これまで自分が養成し來つた人に對する經過に見ても第一練習が隨時隨所に於て手軽に出来る點に於て又速力を増大する點に於て實に肝要な方法である事を確信するものである唯前にもいつた通り相當に速記が出来る様になつてからでないといろ／＼の弊害を伴ふものであるから注意して

欲しい、斯して相當の速力を以て速記し得る様になつたら今度は實地練習に取かゝるのであるがこの場合は都會地は勿論地方に於ても時々開催される講習會とか演說會に行つて演者の講演を速記するのである、そして練習中は書いたものに責任がないので始めからどうでもよいと高を括つて少々胡魔化しても構はむといった風の無責任な態度で臨んではならぬ故に演說が自分の速記程度に伴はず速力の早い時は其全部を書取らうと焦らず極く落附いた態度でなるべく文字に注意し幾ら中絶脱落してもよいから自分の速記し得る範圍で書き取らねばならぬ徒らに焦つて全部を速記し様とする精神に疲勞を來たし文字は紊れ何等得る所がないといふ結果に終るのであるこの實地練習を繰返し行ふ時は漸次場所なれがすると共に如何なる講演講述と雖も應て完全に速記し得る様になるのであつて要するに速記術其ものは簡單であるがこれが充分上達するまでは多大の努力を必要とするの

であつて辛棒強い人の最後の勝利となるものである事を忘れてはならぬ、故に最初から餘り馬鹿にしてかゝると間違である事を特に注意して置たいのである、以上述べたる如く速記の練習は漸を追ふて進むのであるがこれと同時に速記者たらんとする者は常に常識の涵養と學術的修養を積まなければならぬ、何となれば速記術其ものは至極簡單なものであるがこれが應用の範圍は多方面に亘つて居るものであつて新聞社の電話速記に於て見るも僅少なる通話時に或は海外電報或は政治經濟方面の通信から一轉して社會種となりさては演劇角力相場の記事と千變萬化變轉極りなき通信を然も送話者が一瀉千里の勢を以て讀むのを速記するのであるから餘程常識が發達して居ないと充分にそれを咀嚼理解する事が出來ず飛んでもない間違つた翻譯をして失敗する様な事になる又講演速記にしても政談演說もあれば學術的専門の講演もあるといふ具合に一人前の速記者となるにはこれ等

の各方面に通りは通じて居なければならぬので速記者と名乗つて社會に乘出すまでには並大抵の苦心ではない又速記は書取つたものを翻譯しなければならぬものであるから漢字の使方から假名遣まで細心な注意が必要である、故に日常これ等各方面に亘る修養が肝心であつて速記術其ものに熟達するのみでは到底大を成す事は不可能である、然し凡そ人間の腦力には限りがあるものであるからこれ等多方面の智識を修め學術の蘊奥を極むる事は到底よく一人の力を以て爲し得るものでない事は勿論である故に一部門の學術に就て其の蘊奥を究むるよりもなるべく多方面に就て淺くとも博く所謂博覽強記常に讀書を怠らず新聞紙等も自己の趣味に適する方面のみでなく全紙面一通りは目を通す様にして大は時勢の推移から小は演藝廣告の端までも一讀する位の熱心を持たなくてはならぬこれを要する速記者としての成功不成功は其常識の程度如何によるといふも差支へないのである

而して新聞記事なら七、八十行から一段前後を速記し得て完全に翻譯し得る様になれば最早一人前の速記者となつたのであつてそれ位の腕に達すれば大抵の演説講演は速記し得るものである、なほ速記術は其文字の連綴の巧拙によつて速力に大なる相違を來たし又翻譯に際し非常に難易のあるものであつて以上講述したる所の文字の連綴、並に諸種の方則、略字の使法等は左の掲ぐる應用例につき研究せられたい、なほ最後に

一、臨機の省略法に就て

一言して置くがそれは成語熟語の省略と和漢字代用省略法であつて成語熟語といふのは例へば『始は脱兎の如く終りは處女の如し』とか『虎は死して皮を殘し人は死して名を止む』『羊頭を掲げて狗肉を賣る』といふが如き類のものや『藝は身を助く』とか『千仞の功を一簣に欠く』といった風のものである、これ等は汎く人口に膾炙したる語句であつてこれ等の語句は何人も

其前半を聞いただけで直ちに後半を推知する事が出来るものであるから實

際速記事務に當る場合には其前半の文句を速記したのみで後半は省略して

置くのである此場合には其後半の文句を省略した符號として×字型の省略

符號を書いて置き後に翻譯する場合に全文を挿入するのである例へば『始

は脱兎の如く終りは處女の如し』といった場合にはまづ『始めは脱兎の如

く』と速記し『終りは處女の如し』を×型省略符號によつて略して置くので

ある次に和漢字代用の省略法といふのはこれ亦汎く人口に膾炙して居る成

句又は地名人名等に對しては成語熟語の場合と同じく其全文を速記しなく

とも翻譯の際に過誤を來たさぬ範圍に省略して仕舞ふのであつて例へば『

總理大臣加藤友三郎』とか『米國大統領ハーディング』『帝劇女優森律子』『宮

城縣仙臺市』とかいふ文句に對しては總理大臣と速記文字で記したら加藤

友三郎と速記しなくとも假名のカでもよく漢字の加でもよいから其頭文字

を一字記しただけで後は全部省略しても翻譯の際何等の過誤を來たさぬの
であつてこれ等の語句が連続して發せられる場合には非常に便利である又
以上の外に同一の講話とか文章中に同一の語句が澤山繰返して出て來る時
は最初の一、二を速記文字で正確に記して置けばあとはそれ／＼漢字なり
假名文字なりで其頭文字を書いただけで省略し得るものでこれを稱して臨
機の省略法といふのである、唯これは速記に充分熟達した後ちに始めて應
用すべきものであつて未熟の間は餘り使用せぬ方が過ちがない様である

一、全法を通じての速記例

本應用速記術の講述はこれで其全部を終つたのであつてこれ以外には何等
の法則も秘法もないのである、なほ文字の連続並に諸種の省略法等は左の
速記例に就て仔細に研究されたい。

しつつあるが 然し この 思想と 生活に

Handwritten cursive text corresponding to the first line of text above.

原始時代に 人類が 共同生活を

Handwritten cursive text corresponding to the second line of text above.

爲し始めた 頃より 既に 曙光の 一閃はあつたのである。

Handwritten cursive text corresponding to the third line of text above.

全法則應用連綴例

(其 二)

農商務省 發表 本年 五月 末日

Handwritten cursive text corresponding to the first line of text above.

現在に於ける 九州 四國 山陰と山陽 近畿及び

Handwritten cursive text corresponding to the second line of text above.

全法則應用連綴例

(其 一)

人類が 史上に現れ 社會的 政治的に

Handwritten cursive text corresponding to the first line of text above.

活動し 始めてから 種々の 政体を 造り

Handwritten cursive text corresponding to the second line of text above.

甲論 乙駁 而して 今や 民本

Handwritten cursive text corresponding to the third line of text above.

思想が 社會の 基調となり 人類 最高の

Handwritten cursive text corresponding to the fourth line of text above.

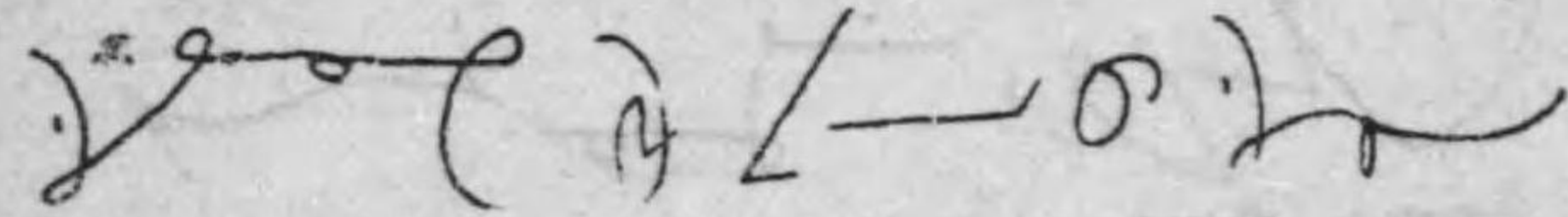
理想となり 世界人類が 之を 理解せん

Handwritten cursive text corresponding to the fifth line of text above.

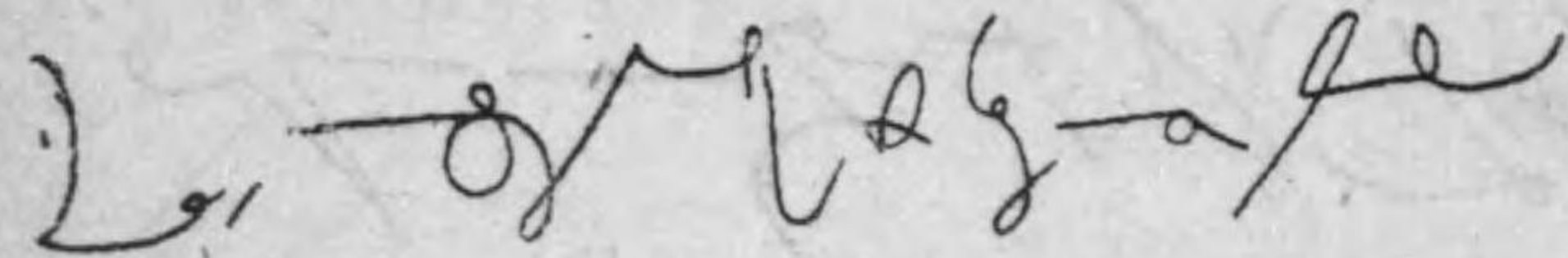
全法則應用連綴例

(其 三)

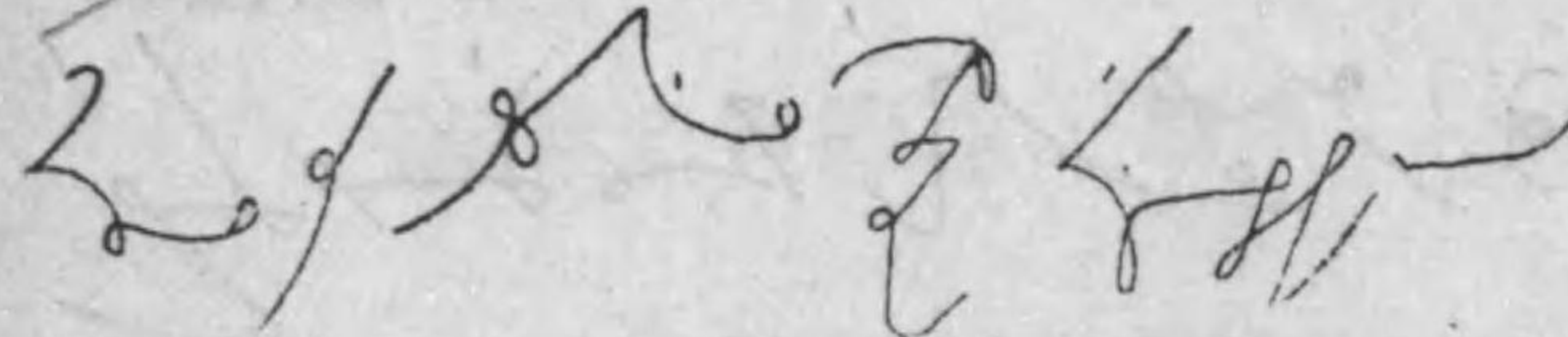
財政會記者 諸君 私は 今回 財務の



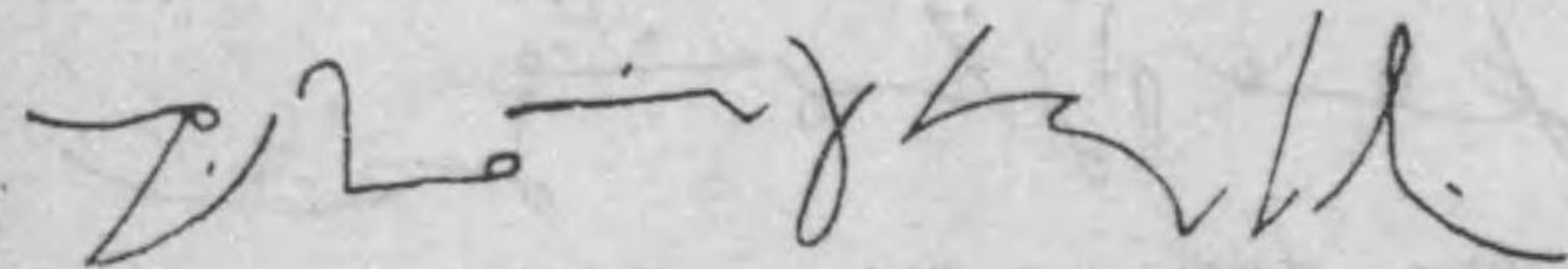
重任を 汚す事に相成まして 自ら 不才を顧みて恐懼の



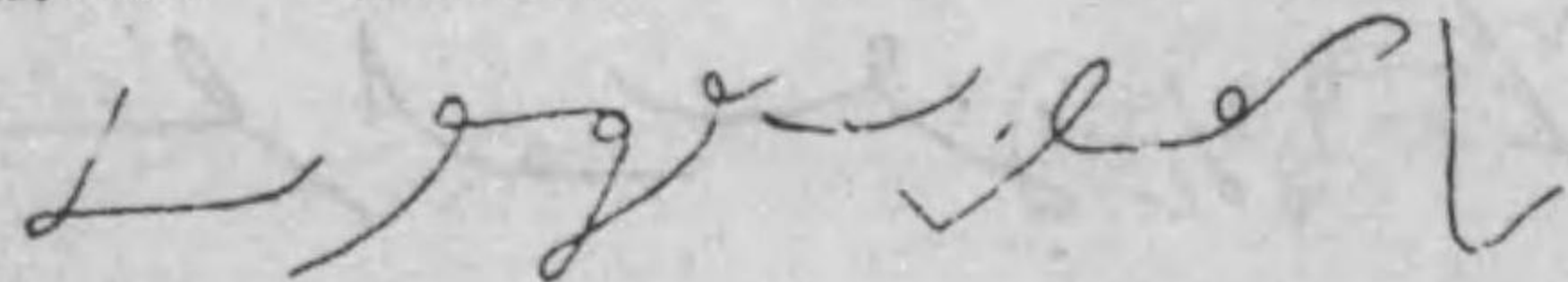
至りに堪ませぬ致々奴馬に頼ちまして努力致したいと存します



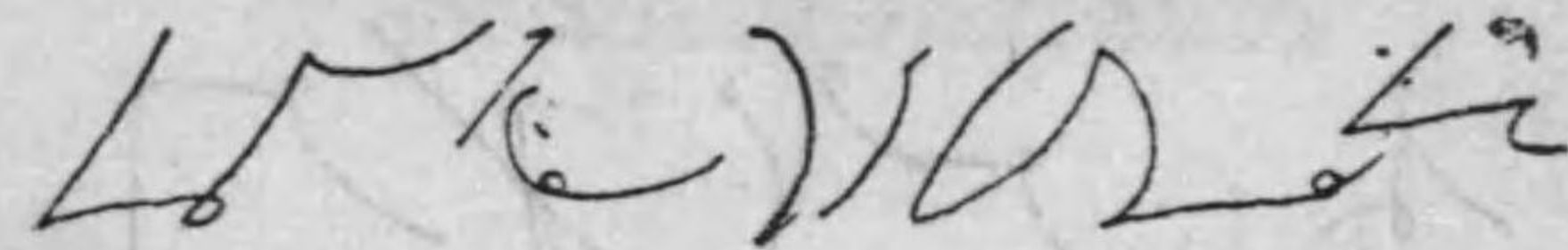
何卒 厚き 御援助を 賜はらん 事を 切望



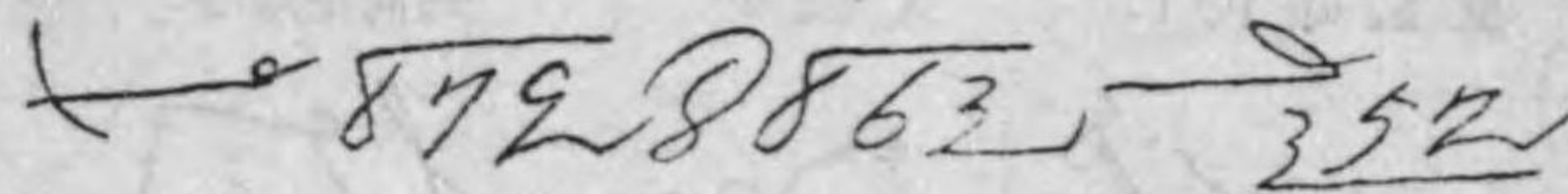
致します 世界大戦の 影響によりまして



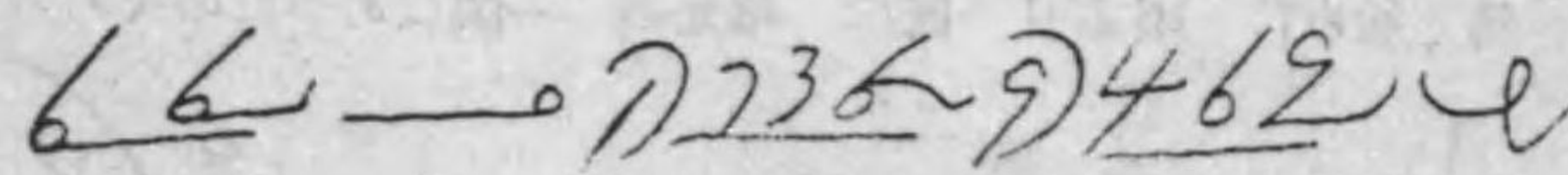
東海道の 一部の 春蠶 豫想收繭 高は



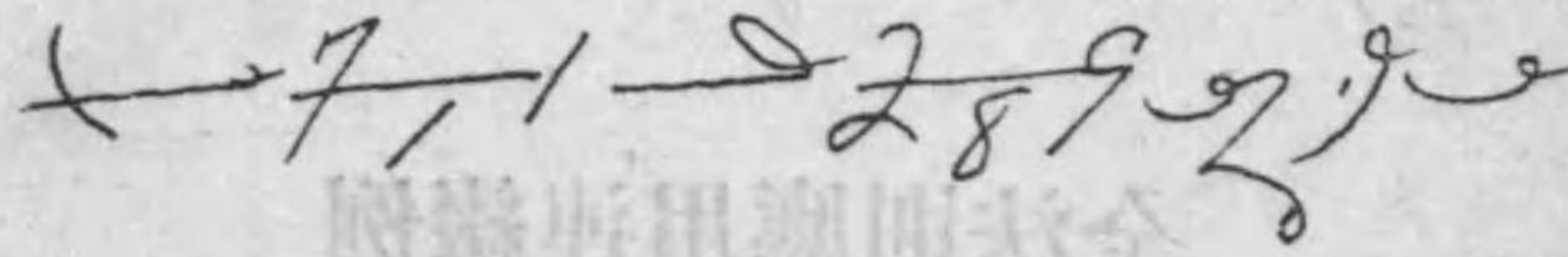
白繭 八百七十九萬八千八百六十三貫 黄繭三百五十七萬



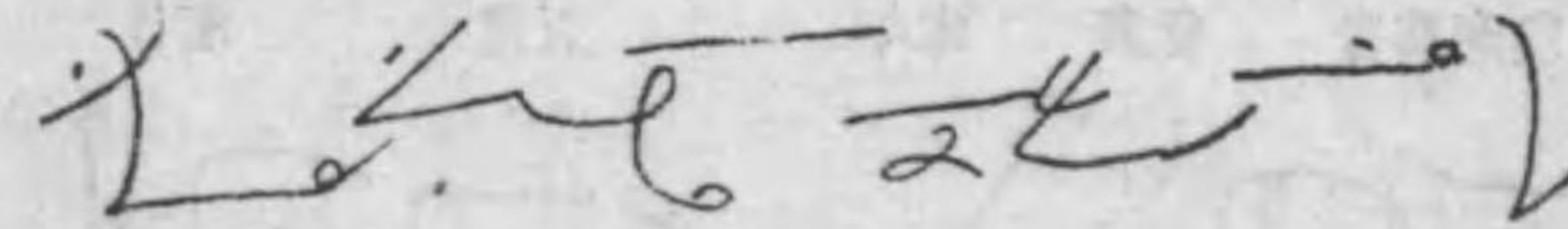
六百六貫 計 一千二百三十六萬九千四百六十九貫にして



白繭七割一分一厘 黄繭 二割八分九厘 に當り 前年



實收繭高に 比すれば 二割四分の 減收を



示して 居る。

